

文部科学省「平成 27 年度いじめ対策等生徒指導推進事業」

～不登校児童生徒等の学校復帰支援並びに社会的自立支援の取り組み～

<報告書>

発行 : 特定非営利活動法人 ふおーらいふ

はじめに

当法人は、早くから不登校支援・発達障がい支援を行う「インクルーシブ教育」の現場であり、体験を中心に展開してきた総合学習プログラムの手法としてアクティブラーニングに取り組んできた。その意味においても、今回当法人が取り組んだ『不登校の生徒への体験学習による学校復帰及び社会的自立支援事業』プログラムは、長年不登校の子ども（発達障がいを持つ子どもも含む）と関わってきた当法人の集大成（課題はあるが）とも言えるものになったと考える。

さて、フリースクールでの子どもとの関わりは、学校でのそれとは大きく異なる。それは、学校のように4月に一斉に入学し、同学年で授業が進み、一律に集団行動を体験するのではない。まず、フリースクール入学は自分で決める。不登校になる時期や動き出せる時期は決まっていないので、個人によって入学時期がまちまちであり、異年齢の子どもたちが共に過ごし、日々の活動参加には強制がない。また、それぞれ発達段階に応じた個別の関わりが必要なうえ、そこで、一人ひとりに合ったマンツーマンの学習支援をしている。中には小さくても集団であること自体を苦手とする子どもや、様々な特性を有して困難さを抱えている子どももいる。

それゆえ学校と同じカリキュラムをフリースクールで用意するのではなく、あくまでも子どもが主体的に学ぶ場の創造が必要なのである。

9月に始まった当法人のプログラムは上記のような様々な条件や背景を持つ子どもたちが、ふぉーらいふで一貫して行ってきた「地域交流・体験学習」に参加した。このプログラムは、どの時点から参画しても十分に達成感が得られるものであり、それをきっかけに仲間意識が芽生え、集団になじんで、その意義を実感するきっかけにもなっている。

子どもたちが取り組む数々の体験活動を客観的に観察するアンケートを地域住民の方々にご依頼したことで、不登校の子どもへの理解や彼らが社会参加をするにあたっての意見も伺えた。

また、子どもが体験活動後に自分を振り返り、それを自らのものにするために「ナラティブ」（語り）を行った。それによって子どもの成長も促され、スタッフとの信頼関係も醸成された。また、彼らはそのことでいろいろな事象を改めて「意識する」ことから様々な「気づき」があり、自己効力感が増していった。そのためのスタッフの準備と共有には十分に時間をかけ、事前にコーディネーターを中心に話し合いがもたれた。一つひとつの「ねらい・大人の動き」を確認し共有しながら行うことで、その活動の意味・目的が子どもたちにも伝わり、活動もスムーズに行えたように思う。こうした中で、自分を客観的に捉え自己肯定感を自ら引き上げ、次のステップを踏む準備を整えた子どももいる。

この事業が遂行できたことは、地域や各方面の方々のご理解とご協力によるものと、深く心より感謝申し上げます。

特定非営利活動法人ふぉーらいふ
理事長 中林 和子

= 目次 =

はじめに

| | |
|--------------------------------------|---|
| 1. 平成 25 年度いじめ対策等生徒指導推進事業について | P. 02 |
| 2. 実施概要 | P. 06 |
| A. 地域交流体験学習における実践について | |
| A-1 垂水区民スポーツの日 | |
| A-2 垂水区ボランティアまつり | |
| A-3 神戸市西水環境フェア | |
| A-4 垂水商店街催事(いかなご祭) | |
| A-5 その他地域のボランティア活動 | ・ 商大祭フリーマーケット ・ もちつき大会 ・ フリースクール文化祭 |
| B. 仕事体験学習における実践について | P. 13 |
| B-1 農業体験学習 | ・ 稲刈り体験 ・ 畑作業体験 ・ 調理実習体験 |
| B-2 林業体験学習 | |
| B-3 仕事体験学習 | ・ 水商店街歳末フェア ・ 画廊喫茶 |
| 3. アンケートまとめ及び分析 | P. 19 |
| 4. ナラティブ（自分語り）のまとめ及び分析 | P. 32 |
| 5. 「いじめ対策生徒指導推進事業」における実践活動研究のまとめについて | P. 35 |
| 【付録】 事業実施後 スタッフ対談 | P. 37 |

1. 平成27年度いじめ対策等生徒指導推進事業について

研究テーマ：不登校の生徒への体験学習による学校復帰及び社会的自立支援

【研究の要約】

地域の事業所、関係団体等と協働し、不登校児童・生徒の総合的な学習プログラムを実施する。これにより同児童・生徒の基礎学習能力やコミュニケーション能力を育成し、彼らの学校復帰支援や、社会的自立支援を行う。また、本プログラムの実施過程に関わりのある地域の事業所等にアンケートを行うとともに、プログラムへ参加した不登校児童・生徒にヒアリングを実施する。これらの結果をまとめ不登校児童・生徒の学校復帰・社会的自立支援モデルの構築を目指す。

1. 研究の構想

(1) テーマを設定した背景

特定非営利活動法人ふぉーらいふでは、18年にわたりフリースクールを運営し、不登校状態の児童・生徒の自立支援、心のケアを行ってきた。当法人のこれまでの支援の取り組みから、不登校状態になる子どもが直面する主な原因として、以下の4点が挙げられる。

- ①友人らとの人間関係のつまずき
- ②①に関連し、いじめなどによる同年代からのバッシング
- ③学力の低下や貧困による学習格差、運動能力の低さからくる学校生活での自信喪失
- ④親子を中心とした家族とのコミュニケーション不足

これらの原因のうち、①と②と③の問題を解消するには、不登校児童・生徒に彼らの居場所を確保するとともに、体験学習をベースにした、総合的な学習プログラムの提供が有効であることが、当法人の過去の取り組みから明らかになってきている。

そこで、不登校の児童・生徒に対し、体験学習の機会を提供することにより、彼らの基礎学習能力や、コミュニケーション能力の向上、自己肯定感、自己有用感の回復を目指す。

また、本取り組みに関わる地域の事業所等（個人のボランティアも含む）へアンケートを実施し、不登校の児童・生徒がどのように変化してきているか客観的な評価を得るとともに、参加する不登校児童・生徒にも自分語り形式のヒアリング（以下「ナラティブ」という。）を実施する。

これら一連の取り組みにより結果として、学校復帰支援や社会的自立支援につなげていく事が可能であると考え、またこれら取り組み方法を体系化し、基礎データを一般に公開することで、不登校問題の解決並びに予防に寄与するとともに、不登校問題に対して有効な新しいモデルの構築を目指す。

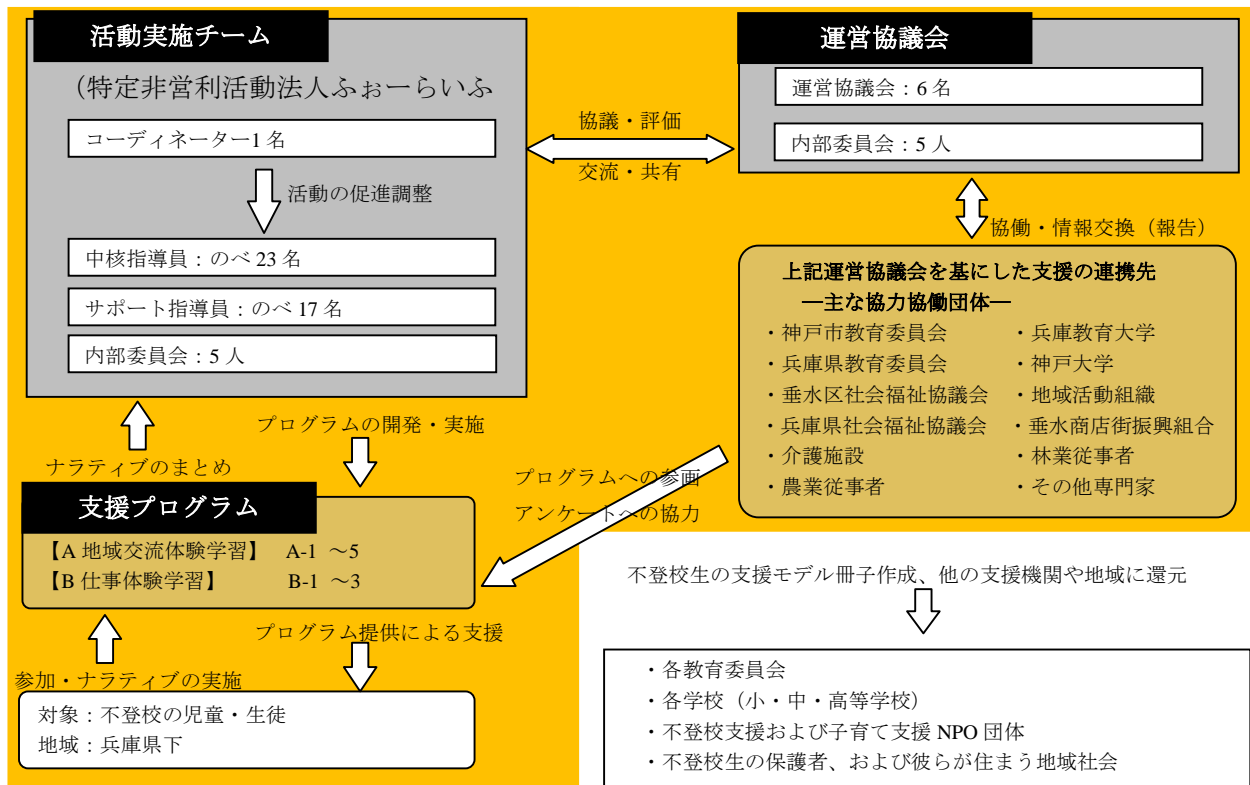
(2) 調査研究の推進組織体制

ア 調査研究組織について

- (ア) 当法人内に、本調査研究事業専任のコーディネーター1名と活動（総合的な学習支援）の実施を補佐する指導員若干名により構成される、活動実施チームを設置し、本研究事業を推進していく。
- (イ) 事業推進にあたって、活動実施チーム内に内部委員会を設置する。この組織は、コーディネーター並びに指導員により構成する。
- (ウ) 本研究事業の内容を検討・評価する組織として、運営協議会を設置する。この組織には、地域の教育または心理、地域福祉の専門家と専門機関職員により構成する（ここには、2の活動実施チーム内に設置する内部委員会の構成メンバーを含む。）
- (エ) 運営協議会で検討した内容をもとに、内部委員会で具体的なプログラムを作成し、活動実施チームにより、不登校の児童・生徒へプログラムを提供するとともに、アンケートやナラティブを実施していく。

※組織のイメージは以下の推進組織体制図を参照

推進組織体制図



※活動実施チームは、不登校の児童・生徒たちが次項で示す A・B の体験学習を選択できるように支援する。また体験学習後に参加者へナラティブを実施する。

※運営協議会は、前述の収集データを分析し、各体験活動に参加する前と後で参加者個人にどのような内的変化があったかをまとめ、プログラムの効果を検証する。

(3) 事業の内容

【A. 地域交流体験学習】

A-1 垂水区民スポーツの日

神戸市垂水区社会福祉協議会と協働し、不登校の生徒と地域のボランティアにより垂水区ボランティアセンターが出店する障害物競争コーナーの企画運営を行う。また、企画当日は不登校の生徒がボランティアとして参画し、ともに活動する地域の人々と交わり、組織の概念、人間関係づくりを学ぶ。

A-2 垂水区ボランティアまつり

垂水区ボランティアセンターと協働し、ボランティアまつりを実施。当日の受付や体験ブースの企画・運営を不登校の生徒に担ってもらい、地域住民との触れ合いを通して、コミュニケーションスキルやプレゼンテーション能力を養う。

A-3 神戸市西水環境フェア

神戸市環境局が主催する西水環境フェアで、福祉のブースとして科学実験のコーナーを設置し、不登校の生徒に企画・準備を担当してもらい、当日は実験方法を来場者に教える体験してもらい、一連の流れを通じ、企画の段取りや他者との協働などを学び、コミュニケーション能力を養う。

A-4 垂水商店街催事

垂水商店街振興会との協働で、地域のまつりに出店参加する。出店内容の企画・販売を不登校の生徒に任せ、品質管理や販売方法を学んでもらい、また、垂水商店街振興組合を含む地域社会で働く大人との交流を通じ、彼らに地域社会への参画を意識してもらいきっかけを作る。

A-5 その他地域のボランティア活動

地域交流センター等で地域住民が実施する文化祭等に参加する。これにより幅広い年齢層の人と不登校児童・生徒の交流を図り、彼らが地域活動へ参画できるようにする。

【B. 仕事体験学習】（兵庫県内）

B-1 農業体験学習

専門家の指導の下、田植え・稲刈りなどを地域の人々との協働で行う。畑では土作り・野菜作り・収穫・調理を体系立てて体験し学習する。これにより不登校の生徒が農業(第一次産業)の現場について学ぶきっかけを作るとともに、従事した作業がどう展開し結果に結びつくのかを学んでもらい、忍耐力や継続する力を身に付けてもらう。

B-2 林業体験学習

里山の整備、苗木植えなど、林業体験を通じて、不登校の生徒たちに自然環境に対する意識を高めてもらう。また、里山の整備を通じ、人道ができた、広葉樹の生育環境を整えることが出来たなど、目に見えてわかる達成感をもとに、彼らの自己効力感の回復を目指す。

B-3 仕事体験学習

不登校の生徒に幼稚園、食堂、喫茶などから選択・仕事体験してもらう。これにより彼らが、人との関わりや、経済活動について学ぶきっかけを作る。また彼らには、労働やそれによって得られる職業スキルについて意識してもらいとともに、労働の価値を実感してもらう。

(4) 検証の視点、方法

ア 運営協議会において取り決めたプログラム上の留意点

| | |
|-----------------------------|---|
| (ア) 具体物を介し多角的な学習ができる環境を用意する | <ul style="list-style-type: none">● 対面してコミュニケーションするより物を介しての方が安心して話ができる● 道具の使い方を学ぶことで自己肯定感や自己有用感を高める |
| (イ) 指導者側の工夫により興味関心を高める | <ul style="list-style-type: none">● 文字でなく、絵で示すなどして工夫する● 指導者側の工夫が重要で子どもの声をまずは聞くことが大切● 質問する時は Yes・No で答えられる内容にして、No という答えが返って来た時はそのまま終わらせずに少し交渉してみる |
| (ウ) 時間や目標は子どもの状況に即した設定を心がける | <ul style="list-style-type: none">● 達成する前提でなく、目標にしつつ、できるところはどこかを考えて設定し、できる子どもをモデルにしない● 終わったら楽しみがあるなど見通しがわかるようにしておく● プログラムが絶対的なものにならないように注意する |

イ 内部委員会において運営協議会の内容を踏まえて議論した検証の視点、方法など

| | |
|----------------------------|--|
| (ア) 本事業実施プログラム共通の目標 | <ul style="list-style-type: none">● フリースクールの生徒が社会に受け入れられていないのは何が理由か明らかにする● 職場の人が子どもたちのどの部分を重視しているかを知る● 最終的なまとめは、教育現場に従事する人が不登校の子どもと接するヒントを得られるものにする● 今年はプログラムに積極的に参加する子どもが少ないが、可能性を考慮し、不参加の場合でも、当日までの働きかけによって子どもの意欲の変化がみられるよう工夫する |
| (イ) 準備段階での子どもたちへの告知並びに働きかけ | <ul style="list-style-type: none">● 各プログラムに参加するにあたり何が必要か子どもと話し合う● 子どもたちが何をしたいかというニーズをくみ取り、出来ること出来ないことを理解させ、子どもと交渉することを重視する● 参加経験のある子から初参加の子へのアドバイスを促す |
| (ウ) プログラム実施後の各データの取り方 | <ul style="list-style-type: none">● 職員、事業所、指導員、ボランティア等当日かかわりのある人を対象にアンケート（記述式）を実施● 参加者（子ども）へナラティブによる聞き取りを実施 |

ウ データ収集のポイント

| | |
|----------------|---|
| (ア) データ収集のポイント | <ul style="list-style-type: none">● 本事業を通じて不登校児童・生徒とどのようなコミュニケーションをとったかなどを自由に記述する項目を設置し、前項の間と合わせ定量的なデータと定性的なデータを収集する● ナラティブの実施により、本事業が不登校の児童・生徒にとって安心感のある提案であるか、各体験学習には自信をもって取り組めたか、他者への信頼関係づくりができたかなど、記述式では得にくい彼らの自己評価の基礎データを収集する |
|----------------|---|

2. 実施概要

A. 地域交流体験学習における実践について

| | | | |
|-----|---|--|-------------|
| 活動 | A-1 垂水区民スポーツの日 (A 地域交流) | 日程 | 2015年10月31日 |
| 概要 | 垂水区の年次恒例イベントである垂水区民スポーツの日に「障害物競争」のブースを地元のボランティアさんと共同で運営した。 | | |
| ねらい | 地域のボランティアと協働し、障害物競争のブースを安全に運営する。気持ちのいい接客について学ぶ。地域社会に参画し人の役に立つ経験をする。任された役割を全うできる力を身につける。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> (1) 障害物競争のブースの流れを確認する (2) 必要な物品を準備する (3) 気持ちのいい接客について考える | <ul style="list-style-type: none"> A) 子どもたちがやってみたい役割について意見交換する機会を作る B) 当日不参加の子どもも準備作業に参加できるよう促す C) イベントへの「参加者の相手をする」ということを確認する | |
| 展開 | <ul style="list-style-type: none"> (1) 地域のボランティアと顔合わせをする (2) 障害物競争の準備をする (3) 流れを確認し、役割分担を決める (4) 休憩をとりつつ客の誘導や競技方法の説明を行う (5) 休憩時、同時開催の水環境フェアで活動中のメンバーの様子を見学に行く (6) 片づけ | <ul style="list-style-type: none"> A) 子どもたちが活動しやすいように、分担方法についてボランティア側と打合せを行う B) 子どもとボランティアが自然とあいさつできるように声かけを行う C) 最初の参加者の誘導を見本としてやってみせ、発達障害のある子どもに対しては丁寧に指示を出す D) 手が回っていない部分は適宜フォローする E) 参加者やボランティアの方とのコミュニケーション方法についてアドバイスする F) 休憩がとれるよう指示を出す G) 子ども同士やボランティアの方と彼らが協力しやすいように指示や声かけを行う H) 子どもたちを労う声かけを行う | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちは分担された役割を理解できていた ・参加者の対応が機械的になりがちで、人との交流を丁寧にサポートすべきだった ・子どもたちとボランティアの交流にかける時間が双方に負担とならない様、配慮すべきだった | | |

《プログラムの様子》 障害物競争の各担当を担う子どもたちの様子



| | | | |
|-----|--|---|------------|
| 活動 | A-2 垂水区ボランティアまつり (A 地域交流) | 日程 | 2016年3月26日 |
| 概要 | 地域の祭り(垂水区ボランティア団体主催)で他団体のボランティアと協働して抽選会場とコミュニケーションゲームのブースを運営し、フリースクールの活動もパネル展示をして紹介した。また、着ぐるみを着て参加者と交流した。 | | |
| ねらい | 地域のボランティアと協働してブースを運営することを通して、社会に参画し人の役に立つ経験や、自分の役目を全うする経験をする。フリースクールの活動内容を展示し地域に発信する。着ぐるみなどを通して他人とコミュニケーションをとる方法を体感する。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 当日の内容を確認する (2) 事前に抽選会で使用する抽選ボックスとクジを作成する (3) 活動を紹介する展示用の資料を作成する (4) 抽選ボランティアについてスタッフを交えて事前にシミュレーションを行った | A) 着ぐるみボランティアについて、過去の活動写真なども交えて仕事の内容を説明する B) 抽選ボランティアについてシミュレーションを行う | |
| 展開 | (1) コミュニケーションゲーム(カードゲーム)のルールを確認する (2) ゲーム班と抽選班それぞれの動きを確認し、役割分担をする (3) 会場の外で着ぐるみをきて祭りを宣伝する (4) 地域の団体が出店しているブースへ参加し、地域の方と交流する (5) 自分たちの判断で交代や休憩をとる | A) 子どもと一緒に地域のボランティアの方に挨拶する B) ゲーム班と抽選班それぞれの動きを紙に書き、子どもと一緒に確認する C) 子どもと地域の方が言葉を交わせるチャンスを見つけサポートする D) 適宜休憩や交代の声かけをする | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが積極的に取り組んでいた(ゲームや抽選という遊びの要素があり、適度な自由さのあるお祭りだったからと考えられる) ・小学校低学年や参加回数の少ない子どもは休憩や交代の際に大人の声かけが必要 | | |

《プログラムの様子》 ゲームブース(左)と着ぐるみを着て宣伝する子ども(右)の様子



| | | | |
|-----|---|---|-------------|
| 活動 | A-3 西水環境フェア (A 地域交流) | 日程 | 2015年10月31日 |
| 概要 | 垂水区の年次恒例イベントである水環境フェアに「スライム作り」の店を出店した。 | | |
| ねらい | 地域のイベントへの出店（スライム作り）を通じて、サービス提供の仕組み、対価を伴うサービスの責任や接客について学ぶ。スライムの作り方を人に説明することで、プログラムの内容を自分で理解して人に伝える、というスキルを身につける。地域の人々と関わり地域社会に参画するという経験や、人の役にたつという経験をする。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> (1) スライム作りの店の運営の流れについて確認する (2) 当日の役割分担について話し合う (3) 事前にスライム作りの練習を行った。 (4) 材料の購入について分量などを話し合い、実際に購入した。 (5) スタッフが客役を務め、事前にシミュレーションを行った。 | <ul style="list-style-type: none"> A) 子どもたちが作業の流れをイメージしやすいよう絵を見せる B) 自分がやってみたい役割を考えるよう促す C) 代金の扱い方について丁寧に説明する D) 事前にシミュレーションを行う E) 客への声かけなど注意する点を確認する F) 相手への分かりやすい説明の仕方についてアドバイスする | |
| 展開 | <ul style="list-style-type: none"> (1) 流れを確認し、役割分担を決める (2) 受付は、お金の受取の確認や管理、順番や定員のコントロールを行う (3) スライム作りの指導を水、糊、ホウ砂といった材料の分量を間違えないように丁寧に行う (4) 来店した子ども達に水がかからない配慮や、スライムが楽しく作れる声かけを行う (5) 道具が使われるペースに合わせて、手早く洗浄する (6) 片づけ | <ul style="list-style-type: none"> A) 分担された役割は交代で行うことを確認する B) 代金、お釣りの確実な受け渡しのポイントを一緒に確認する C) 客に水がかからないか、失敗せずに作れているかを見て、子どもや客に適切な声かけを行う D) 適切なタイミングで休憩がとれるよう指示を出す E) スピードが必要な作業であるため、子ども同士で協力しあえるように声かけを行い、適宜フォローする | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・100人前後の客に対応するため、経験者の存在が重要と感じた ・経験のある子どもは周囲の状況をよく見て声かけもできていた ・前年より作業を減らしたため、初めての子どもも客との交流に集中できていた | | |

《プログラムの様子》 来場者へスライムつくりを指導する子どもたちの様子



| | | | |
|-----|---|--|-----------|
| 活動 | A-4 いかなご祭り (A 地域交流) | 日程 | 2016年3月5日 |
| 概要 | 地域の祭り(垂水商店街振興組合が主催)に参加し、手作りのパウンドケーキ・ラスクの販売や紅茶のサービスを行った。また、手作り缶バッジを景品としたガチャガチャで寄付を募った。 | | |
| ねらい | 商品の制作から販売までの流れを一貫して体験する。大人への接客を体験し、またそのための集客の工夫(試食・陳列方法など)を試みる。制作した物が商品として人の手に渡る喜びを知る。地域の人々との交流を通して、社会参画の機会を得る。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 何を売るか話し合う (2) 販売数を予測して、商品数を決める (3) 買い出し係、調理係、包装係、看板係に分かれて準備する | A) 子どもが意識的に活動できるよう、当日の流れや担当スタッフをまとめたポスターを作成し掲示する B) 商品・看板作りをサポートする C) 子どもと一緒に接客マニュアルを作成する | |
| 展開 | (1) 開店前に集合し準備する (2) 接客係・紅茶提供係・買い出し係に分かれて役割を確認する (3) 客が足を止めやすいような看板や陳列になるように工夫する (4) 交代で休憩を取りながら、呼び込みや接客をする (5) 金銭の取り扱いに注意する (6) 他に出店している地域の人たちの様子を見学する (7) ビンゴ大会に参加する (8) 片づけ | A) 子どもと一緒に一日の流れと役割分担を確認する B) 適切なタイミングで休憩をとれるように声かけをする C) 接客・陳列方法や呼び込みの方法についてアドバイスする D) 子どもの手が回らない部分のサポートをする E) スタッフが、客や近くに出店している人などと交流する姿勢を見せる F) 活動後に子どもに感想プリントを配布する | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・天候も良く、子どもが積極的に声かけをして開店1時間半ほどで完売することができた ・子どもはそれぞれの役割を理解し、状況に応じて工夫しながら協力できていた ・役割分担についての理解をスタッフ間でしっかり共有する必要があった ・作成した接客マニュアルを当日の接客係の手元に準備しておくべきだった | | |

《プログラムの様子》 ラスク作り(左)と接客販売(右)をする子どもたちの様子



| | | | |
|-----|--|---|------------|
| 活動 | A-5 商大祭フリーマーケット (A 地域交流) | 日程 | 2015年11月1日 |
| 概要 | 兵庫県立大学の大学祭のフリーマーケットに出店し、事前に集めた商品を陳列・販売した。 | | |
| ねらい | 商品の搬入・陳列・販売・搬出までを一体的に学ぶ。気持ちの良い接客について学ぶとともに、商品を理解し客に対してプレゼンテーションする力を身につける。不測の事態のときの対応方法を事前に学び、実践する。地域の人々と関わり、地域社会へ参画する経験をする。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> (1) 出店の流れを確認する (2) 商品を集めて、どんなものがあるか確認する (3) 商品の良さをどう伝えるかを考える (4) 様々な客を想定し事前にシュミレーションを行う | <ul style="list-style-type: none"> A) 子どもたちに自分がやってみたい役割を考えるよう促す B) 代金の確実な扱い方を説明する C) 商品を丁寧に扱うよう声かけを行う D) 接客でスムーズな応答ができるよう、アドバイスする E) 接客の全体の流れについて事前にシミュレーションを行う | |
| 展開 | <ul style="list-style-type: none"> (1) 商品を搬入し、陳列する (2) 来店者に商品の説明をする (3) 会計をする (4) 休憩時、大学祭の様子を見学する (5) 商品を搬出する | <ul style="list-style-type: none"> A) 商品の扱い方について確認する B) 来店者が見やすい陳列になるよう工夫を促す C) 商品の説明方法等についてモデルを示す D) 気持ちのよい接客になるよう適宜声かけやサポートを行う E) 代金と釣り銭のやり取りに間違いがないかチェックする F) 休憩がとれるよう指示を出す G) 確実に搬出できるよう注意する | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・準備は、前年より出品量を減らしたことで、協力して手際よくできた ・経験者に任せっきりにならないよう交代の声かけが必要だった ・初めて体験する子どもが多かったため、事前のシュミレーションや役割分担を念入りにするべきだった | | |

《プログラムの様子》 商品の説明(左)や陳列作業(右)をする子どもたちの様子



| | | | |
|-----|--|---|--------------------------------------|
| 活動 | A-5 もちつき大会 (A 地域交流) | 日程 | (仲田町) 2016年2月7日 (千代が丘) 2016年2月13日 |
| 概要 | 垂水区仲田町のもちつき大会と千代が丘地域福祉センターのもちつき大会に参加した。仲田町のもちつき大会では手作り缶バッジを景品としたガチャガチャで寄付を募った。 | | |
| ねらい | 身近な地域のコミュニティでの過ごし方や年配の方への接し方を知る。もちつきの方法や道具の使い方を知る。また、自分たちで作った缶バッジが景品として人の手に渡る嬉しさを知る。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 地域の方にまずは挨拶が大事ということを意識する (2) ガチャガチャを準備する | A) まず挨拶をするように声かけをする | |
| 展開 | <p>〈仲田町〉</p> <p>(1) 餅をついているところに並び、地域の人たちから声をかけられながら餅をつく</p> <p>(2) 出来上がった餅を広間で食べる</p> <p>(3) ガチャガチャをしてもらえる様声かけする</p> <p>(4) 餅をつく、出し物を見る、ゲームをするなど、自由に過ごす</p> <p>〈千代が丘〉</p> <p>(1) 餅をついているところに集まって、地域の人たちに交じって餅をつく</p> <p>(2) 出来上がった餅を食べる</p> <p>(3) 自由に過ごす</p> | <p>A) 子どもが地域の人との関わりに前向きな気持ちになれるように、大人が積極的に地域の人と話をし、子どもと一緒にもちつきをするなど振る舞いを工夫する</p> <p>B) 年配の方や参加の小さい子に対して、適切な言葉遣いや態度で接しているか注意して、適宜アドバイスする</p> <p>C) 子どもが挨拶をできるように機会をつくる</p> <p>D) 不登校の子どもたちに初めて接する地域の人たちが子どもたちについて誤った印象をもたないように、子どもたちの至らない部分を補いフォローする</p> | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・1回目のもちつき大会ではスタッフや地域の方の声かけでほぼ全員がもちをつくことができ、ガチャガチャを介しての交流も活発にすることができた ・2回目のもちつき大会では、もちつき以外の出し物がなく、地元の中学生在が多数来て餅をついていたこともあり、もちをついた子どもは少なかった ・当日参加しない子どもの代わりにスタッフが積極的に地域の人々と関わりフォローすることで、子どもについての誤解を防げるのではないかと感じた ・言葉を交わさずとも、子どもが地域の人々と同じ空間で過ごすことができるようなサポートをするべきだった | | |

《プログラムの様子》 餅つき(左)と来場者へ寄付のお礼バッジをつけた(右)時の場面



| | | | |
|-----|--|--|------------|
| 活動 | A-5 フリースクール文化祭(仲間展) (A 地域交流) | 日程 | 2016年2月21日 |
| 概要 | 当団体の年に一度の文化祭「仲間展」を開催。活動発表やお化け屋敷、ゲーム大会、ロング巻き寿司作りなどを企画し実施。地域の方にも参加いただいた。 | | |
| ねらい | 子どもたちがやってみたい企画を実行し、企画力・運営力を養う。地域住民とのより主体的な交流機会を作り、フリースクールの活動の実態を地域に発信する。また、子どもたちで協働して行事を作り上げる経験を通して達成感を得る。時間を意識して活動する。普段の活動場所に外部の人を受け入れることに慣れる。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> (1) ミーティングを重ねアイデアを出し合う (2) 企画ごとに担当を分担し、準備する (3) 地域の方に参加いただけるような内容を企画する(ロング巻き寿司作り) (4) 活動紹介用の年表を手分けして作成する (5) 第三者である地域の方にも分かりやすいように年表や作品のレイアウトを工夫する | <ul style="list-style-type: none"> A) 子どものアイデアを引き出す声かけをする B) 各企画を担当している子どもが困っている場合に対応できるようコミュニケーションを密にとる C) 役割分担が適切かどうか注意する D) 第三者視点でのレイアウトについてアドバイスする | |
| 展開 | <ul style="list-style-type: none"> (1) それぞれが担当する企画の最終準備をする (2) ゲーム大会・お化け屋敷の参加者を募る (3) 客にお茶を用意するなど対応する (4) 分担して前半企画の片付けと後半企画の準備をする (5) 客と交流しながら、企画を運営する (6) 片付けをする | <ul style="list-style-type: none"> A) メンバーだけでは手が回らない部分をサポートする(客対応・片づけ) B) 接客をする際の注意点などを確認した C) できるだけメンバーが一体感を得られるように声かけをする D) 次回につながるよう、感想をメモするように促す | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・日程決めやチラシ作りなどの事前準備が遅れ、地域の人々の参加が少なかった ・初めて参加する子どもが多く、それぞれの役割をこなすことで手一杯になっていたが、経験者からの指示はよく行き届いていた | | |

《プログラムの様子》 お化け屋敷(左)と巻き寿司企画(右)を運営する子どもたちの様子



B. 仕事体験学習における実践について

◆B-1 農業体験学習◆

| | | | |
|-----|--|---|------------|
| 活動 | B-1 稲刈り体験 (B 仕事体験) | 日程 | 2015年9月15日 |
| 概要 | 5月に田植えをした多可郡多可町の田んぼで、生育した稲の収穫を行った。また、活動後、近くの川や民家で自由活動の時間をとった。 | | |
| ねらい | 日本の伝統的な職業を体験し、鎌などの道具の使い方を学ぶとともに、現在の農業における機械作業の効率の良さについても体感させる。また、遠方での活動のため、活動中にタイムスケジュールについて意識させたい。それに伴い、子ども同士で休憩するタイミングや時間などについて話し合う機会を持たせ、集団行動での意見の仕方を考えさせる。田植えに参加していないメンバーでも稲刈り活動のみで十分な学びを得られるよう留意する。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 稲刈り作業の内容について確認する (2) 不参加表明の子どもも交えて、時間や持ち物などについて話し合い、打合せをする | A) 作業内容の事前説明を行う B) 集合時間や服装など、基本的な枠を決める C) 子どもたちが納得して参加できるように意見交換の機会をつくる | |
| 展開 | (1) 道具（鎌）の安全で効果的な使い方・注意点について説明をうける (2) 稲を刈る (3) 休憩をとるタイミングを話し合う (4) 道具の片づけ、落ち穂拾いを行う (5) トラクターで稲刈りする様子を見学する (6) 川遊びや卓球、ゲームなどで、自由に時間を過ごす | A) 危険を避け、安全に道具を使うことを意識し、説明を聞く態度を示す B) 道具の使い方を子ども同士で教えあえるように声かけを行う C) 休憩時間について、自分の意見を言えるよう声かけを行う D) 稲刈りの後の片付け作業についても学べるよう声かけを行う E) 出発時間から逆算して、帰る準備が始められるよう声かけを行う | |
| 所感 | ・休憩についてはお互いに暗黙の了解があり、自分のペースで集中して取り組んでいた ・道具の扱いについては子ども一人ひとりに個別の説明をするべきだった | | |

《プログラムの様子》 昔ながらの方法で稲刈り体験をする子どもたちの様子



| | | | |
|-----|---|--|--------------------------------------|
| 活動 | B-2 畑作業体験 (B 仕事体験) | 日程 | 2015年10月6・23日 2015年12月15日 |
| 概要 | 神戸市西区の市民農園にて市民の方の協力により、夏の時期に指導者に育成の準備を指導してもらい育てた野菜(サツマイモ・ダイコン・カブ)を収穫した。 | | |
| ねらい | 畑作業を通して農業への関心を高める。忍耐力を育て、収穫の喜びを味わう経験をする。普段スーパーに並んでいる身近な野菜を育てることで、人間と自然のつながりを体感する。地域の人との交流機会をもつ。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 畑の所在地と移動ルートを確認する (2) 畑作業にあった服装について知る (3) 夏の間に野菜の種まきと育て方について地域の方から学ぶ | A) 住宅地で暮らしながらも畑を管理するためには、離れた場所で土地を借りる必要があるということが実感できるように声かけをする B) 秋には育った野菜を自分たちで収穫することを説明しておく | |
| 展開 | (1) 綺麗に収穫する方法を地域の方から学ぶ (2) 野菜を収穫する (3) 収穫した野菜を手分けして洗う (4) 洗って葉などを整えた野菜を梱包し、分担してフリースクールまで持ち帰る | A) 継続して畑の作業に参加できるように、適切なタイミングで休憩を促した B) 土や虫が苦手な子どもが無理をしないように役割分担を工夫した C) 大きく重い野菜を運ぶ際に、力がある子どもに協力を頼んだ | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもは文句をいうが、参加率は高め ・毎回の作業内容をスタッフが子どもに丁寧に説明できる必要がある ・育成、収穫、調理という流れが分かりづらいため、年間を通したプログラムにすべきだった ・畑作業の時期や内容に合わせて、他プログラム(調理実習など)の計画を立てるべきだった | | |

《プログラムの様子》 ジャガイモの種芋を植える作業を学ぶ子どもたちの様子



| | | | |
|-----|--|---|------------|
| 活動 | B-1 調理実習体験 (B 仕事体験) | 日程 | 2016年2月12日 |
| 概要 | 調理師免許所持者と飲食業経験者の指導のもと、飲食店の厨房で調理することを想定した職業訓練プログラムを実施した。 | | |
| ねらい | 専門家から本格的な調理方法や道具の使い方、衛生管理、什器の取り扱いを学ぶ。買い出しを通し、一般的な食材等の価格を学ぶ。人と協働して時間内に仕事を終える経験をする。他人が食べるものを作っていることを意識した盛り付け、衛生などの工夫をする。ホール(飲食サービス業)での動きを考える。自分で作ったものを食べる喜び、他者に食べてもらう喜びを感じる。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 調理時の器具の取り扱いについて指導を受ける (2) 衛生管理について指導を受ける (3) 材料の買い出しをする | A) 指導を受けている間、理解が十分に出来ない子どもに対し、個別にサポートを行う | |
| 展開 | (1) 効率の良い調理手順について指導を受ける (2) 班ごとに各自役割分担をして調理する(ハンバーグ・炊き込みご飯) (3) 食器を用意し、盛り付ける (4) 食事の提供スキル(ウェイター/ウェイトレスのスキル)について指導を受ける (5) 実食 (6) 余った炊き込みご飯をおにぎりにする (7) 洗い物・掃除をする | A) 指導者にアンケートを依頼し、本プログラムの趣旨を説明し協力依頼 B) 初めに終了予定時間を知らせて時間を意識して動くよう促す C) 指導者の指示内容をリピートし、参加者が聞き逃しにより作業が滞らないようにサポートする D) 危険・不衛生なことをしている子がいなか注意する E) 飲食サービスを想定した盛り付けや食器の運び方を意識できるように声かけをする | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・調理室を借りて実施したことで切り替えがしやすく集中できていた ・直前にメニューを減らし、時間内に丁度よく活動を終えることができた ・「人の指示通りに再現できる」という目的を指導者・子どもと事前に共有すべきだった | | |

《プログラムの様子》 ハンバーグの調理方法を学ぶ子どもたちの様子



◆B-2 林業体験学習◆

| | | | |
|-----|--|--|-------------|
| 活動 | B-2 林業体験学習 (B 仕事体験) | 日程 | 2015年11月14日 |
| 概要 | 木工教室「里山工房」(三田市)にご協力いただき、木の伐採や薪割りの体験をした。また、焼き芋づくりや木工体験も行った。 | | |
| ねらい | 里山での活動を通じて日本の伝統的な職業である林業について学ぶ。森林保全活動を社会貢献として体験する中で、仲間との協働体験をする。作業を通して様々な道具の扱い方や、安全な作業方法について学ぶ。また、遠方での活動のため、タイムスケジュールについても意識させる。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 里山体験の作業内容について確認する (2) 不参加表明の子どもも交えて、時間や持ち物などについて話し合い、打合せをする | A) 作業内容の事前説明を行う B) 集合時間や服装など、基本的な枠を決める C) 子どもたちが納得して参加できるように意見交換の機会をつくる | |
| 展開 | (1) 集団で電車を乗り継いで工房へ向かう (2) 安全な木の切り方や道具の使い方について学び、実践する (3) 木を切ることで森にどんな効果があるのか学ぶ (4) 怪我をしないように動きやすい服装、滑りにくい靴などを準備する (5) 指導者の指示に従って仲間と協働で木を伐採し、後処理をする (6) 指導者の指導を受けながら、薪割りや木工体験、焼き芋づくりなど興味のあるものに取り組む (7) 片づけ・掃除 | A) 全員無事に移動できているか確認する B) 危険を伴う作業だという意識を促す声かけを行う C) 木を切る効果について指導者に質問する D) 子ども同士で協力しあえるように声かけを行う E) 危険なことをしていないか注意する F) 自分が興味のあるものに意欲的にとりくめるよう声かけを行う G) 出発時間を逆算して片づけを始められるように声かけを行う | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> 子どもはそれぞれが興味をもった作業に集中して長時間でも取り組んでいた 道具の扱いについての説明を子ども一人ひとりに個別に説明し理解を深められた スタッフが指導者の説明をよく理解し、子どもに個別に説明できる必要がある | | |

《プログラムの様子》 林業体験(左)や巻き割り体験(右)をする子どもたちの様子



◆B-3 仕事体験学習◆

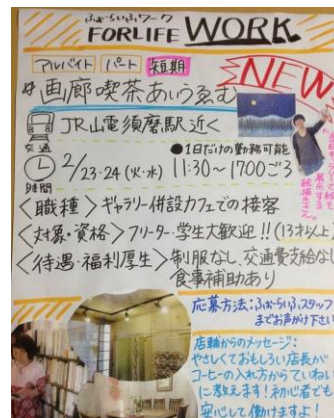
| | | | |
|-----|--|---|------------|
| 活動 | B-3 垂水商店街歳末フェア (B 仕事体験) | 日程 | 2015年12月4日 |
| 概要 | 垂水商店街振興会が開催する歳末フェアに出店し、手作りパウンドケーキとスコーンを販売し、温かい飲み物の提供を行った。 | | |
| ねらい | 物作りから販売までを主体的に行う事で社会的営みを理解する。喜ばれる商品とは何かを考え、大人に対する接客方法や金銭の扱いについても学ぶ。また、地域との積極的な関わりを持つことで社会への参画意識を芽生えさせる。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 何を売るか話し合う (2) 販売数を予測して、商品数を決める (3) 買い出し係、調理係、包装係、看板係に分かれて準備する | A) 販売品目や値段設定についてのアドバイスする B) 子どもたちが自分にあった方法で参加できるように役割分担をサポートする | |
| 展開 | (1) 開店前に集合し準備する (2) 客に足を止めてもらえるような看板や陳列になるように工夫する (3) 交代で休憩を取りながら、呼び込みや接客をする (4) 金銭の取り扱いの手順を覚える (5) 他に出店している地域の人たちの様子を見学する (6) 片づけ | A) 接客の留意点について確認する B) 適切なタイミングで休憩をとれるように声をかける C) 金銭の確実な取り扱いの手順を確認する D) 陳列方法や呼び込みの方法についてアドバイスする E) 子どもの手が回らない部分のサポートをする | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> ・天候が悪かったが、完売させることができた ・子どもたちは役割を理解して取り組んでいたが、活動に参加せず別の場所に行く子どももいた ・参加しない子たちの状況(休憩・トイレ)を他の子どもに説明しフォローする必要があった | | |

《プログラムの様子》 品出し(左)や接客対応(右)をする子どもたちの様子



| | | | |
|-----|--|--|---------------|
| 活動 | B-3 画廊喫茶での職業体験 (B 仕事体験) | 日程 | 2016年2月23・24日 |
| 概要 | ギャラリー喫茶あいうゑむの協力を得て、コーヒーを淹れる技術と、来客に対する飲食物の提供を学んだ。 | | |
| ねらい | コーヒーを入れる専門の機材を使用し、自宅では経験できないコーヒーの煎じ方を学び、来客された方へ提供するところまでを一連の流れを感じながら学ぶことで、飲食店での就業イメージを抱けるようにする。また、来客対応を通して、様々な職種の方と交流する機会を得る。 | | |
| | 活動および子どもの様子 | 指導員の動き | |
| 導入 | (1) 事前に仕事内容や喫茶店の雰囲気について疑問点を解消しておく | A) 求人広告風のポスターを作成し、子どもが興味を持てるようにした B) 職業体験として参加することを意識できるように中学生以上の参加に限定した | |
| 展開 | (1) 喫茶店内の設備について説明を受ける (2) 来客対応の基本について指導を受ける (3) コーヒーの淹れ方について指導を受け、模擬練習を行う (4) 練習で淹れたコーヒーを自分たちで飲み、指導者のオーナーにアドバイスを受ける (5) 来客するまでの間、開催中の展示についての看板を作成する (6) 客の注文をきき、コーヒーを提供、また指示通りに食事を配膳する (7) 客との簡単な会話、客が連れてきた幼児の相手をする (8) 食器の片付けをする | A) 子どもに一日の流れを説明する B) 指導者に指示されていない仕事について気づきを促す声かけをする C) 客との会話が難しい場合のフォローをする | |
| 所感 | <ul style="list-style-type: none"> 子どもは指導者の指示に従って、仕事や交流ができていた 2日目は慣れから言葉遣いや態度に緩みが見えたため、スタッフによる声かけが必要だった 発達障がいなどの困難を抱えた子どもが参加する場合、指導者との事前の打ち合わせをすべきと感じた | | |

《プログラムの様子》 注文の品を用意(左)する子どもの様子と求人広告風ポスター(右)



6. 今日プログラムに参加していた子どもたちが今後社会に出ていくにあたり、
以下の項目はどの程度必要と考えられますか（A～G それぞれ当てはまるものに○）

| | 必要 | ある程度必要 | どちらともいえない | あまり必要ない | 必要ない |
|----------------|-------|--------|-----------|---------|-------|
| A コミュニケーションスキル | ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| B 周囲の理解者 | ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| C 仲間 | ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| D 仕事内容に関するスキル | ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| E 特技 | ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| F 基礎学力 | ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| G 一般常識 | ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |

※A～G の他に、必要と思われることがあれば教えてください

7. その他ご意見・ご感想（自由記述）

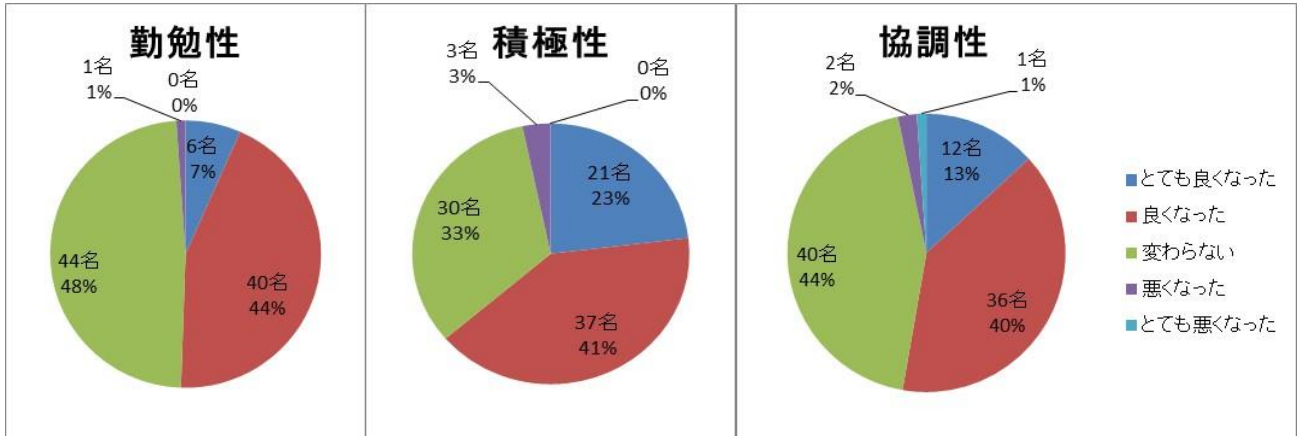
ありがとうございました。

ご記入いただいた内容につきましては、無記名で文部科学省委託事業の報告書に記載させていただきます。収集したアンケートはモデル化し、全国で不登校支援されている機関の支援ツールとして役立てられます。尚、当事業で得た個人情報 は、厳重に管理・保管され、上記以外の目的に使用することはありません。

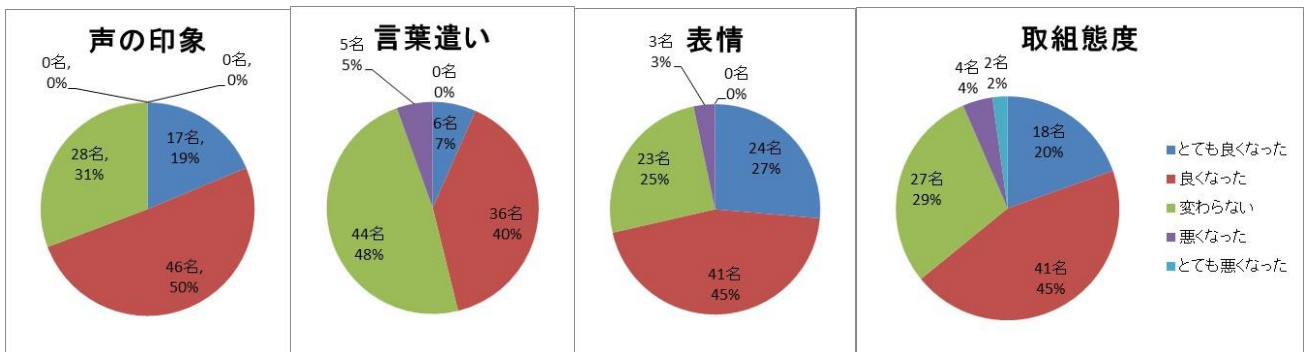
以下はアンケートの結果をもとにグラフ化したものである。

(n=91 職員 35名、団体ボランティア 15名、地域の協力者等 41名)

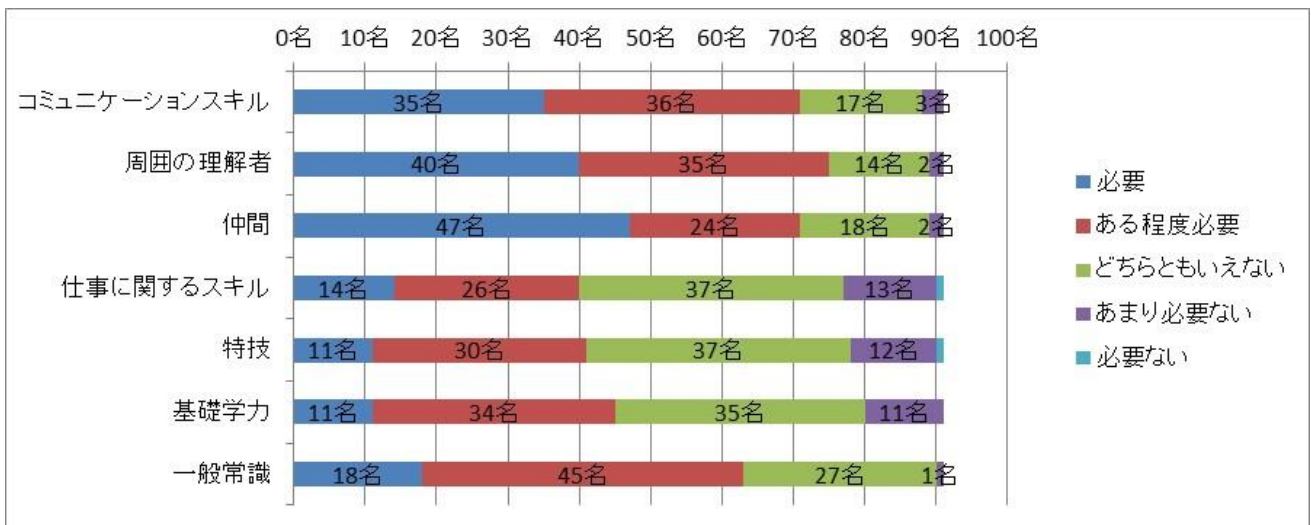
[質問 3] フリースクールの子どもたちへの評価の変化



[質問 4] 子どもたちの印象の変化



[質問 6] 子どもたちが社会に出ていくにあたり各項目はどの程度必要か



アンケートの分析 1

本事業では、プログラムの効果を検証するため、まず[質問 4]で地域の協力者等に対し、不登校の子どもたちの評価の変化をたずねた。結果、各項目とも子どもたちに対する印象が「良くなった」「とても良くなった」という好意的な変化が、勤勉性では 58% (43 名)、積極性が 70% (52 名)、協調性は 58% (43 名)とそれぞれ全体の半数以上を占め、総じて良い評価が得られた。よって本プログラムが子どもたちの取り組み姿勢の向上等に対し、一定の貢献をしていることが伺える。

次に[質問 5]では不登校の子どもたちの印象の変化をたずねた。全体的に印象の変化が過半数を超え好意的な数値を示しているのに対し、言葉遣いの項目のみ「とても良くなった」「良くなった」が 43% (32 名)にとどまるという結果となった。このことから、子どもたちが対外的なコミュニケーションを試みているものの、状況に即した話し方が不十分等の理由によりで、話の受け手側があまり良い印象を持てなかったことが推察される。

これらの結果から、本事業のプログラムが子どもの学校復帰や、社会的自立支援のモデルとして一定の効果が期待できるものである一方、言葉遣いを支援する点において課題を残しているということが明らかとなった。そのため、話し方の事前指導や、マナー講座などの実践支援プログラムを設けるなどして、改善をする余地があると考えられる。

アンケートの分析 2

また、[質問 6]では、地域の協力者等に対し、子どもたちが将来社会に出ていくにあたってどのような事が必要かを問うということを試みた。下記へ「必要」「ある程度必要」という意見が多かったものの順で並べてみる。

| | | |
|-----|--------------|------------|
| 1 位 | 周囲の理解者 | 61 名 (82%) |
| 2 位 | コミュニケーションスキル | 59 名 (79%) |
| 3 位 | 仲間 | 58 名 (78%) |
| 4 位 | 一般常識 | 53 名 (71%) |
| 5 位 | 基礎学力 | 36 名 (48%) |
| 6 位 | 特技 | 34 名 (45%) |
| 7 位 | 仕事に関するスキル | 33 名 (44%) |

不登校の子どもたちが将来次のステップを踏むに際し、周囲の理解者や、コミュニケーションスキルがという意見が多く寄せられる結果となった。

このことから、不登校の子どもたちにかかわる支援者には、彼らの理解者を増やしていくこと、継続的な体験の場の提供を通して、コミュニケーションスキルの習得支援を長期で行うこと、さらにソーシャルスキルトレーニングなどで、対人接触のスキルの習得を短期で実施することなどが求められことになると考えられる。

本事業では、不登校の子どもたちの学校復帰や社会的自立支援を目指すために、体験学習をベースに支援プログラムを実施してきたが、アンケートの結果から、これらの方向性が重要であることが再確認されたといえる。

また、アンケートでは、数値等で表せない評価を自由記述で補ってもらったようにした。以下へ、各プログラムごとにまとめた自由記述部分（[質問 5]、[6]、[7]）を参考として抜粋し示したものである。

[質問 5] 印象に残った場面などがあれば教えてください。

[質問 6] 子どもたちが今後社会に出ていくにあたり必要と思われることがあれば教えてください。

[質問 7] その他ご意見・ご感想

《アンケートの自由記述部分からの抜粋》

A. 地域交流体験学習におけるアンケート

A-1 垂水区民スポーツの日

[質問 5]

- ・初対面の人と話すのは誰でも緊張するが、活動を共にすることでここまで変わるかな、と思うほど活動後はのびのびと人と接する姿が見受けられた。活動前は、自ら発信する場面がほとんどなかったが、活動中や活動後は、こちらから質問したり話しかけたりすると楽しそうに答えてくれ、また、子どもたちから話しかけてくる場面もあった。[40代 地域の協力者]
- ・フリースクール内では面倒くさがりな子も、今回の活動では自分で考え積極的に動いていたのが良かった。特に、タイヤ引きでなかなかタイヤが動かないとき、自ら進んで引くのを手伝ったり人が足りない場面ですかさず助けに入ったりする場面が多かった。子どもたちはそれぞれに割り当てられたことに対して仕事意識を高く持っていたように思う。[20代 団体のボランティア]

[質問 6]

- ・忍耐力／ストレスマネジメント能力[40代 地域の協力者]

[質問 7]

- ・地域全体で不登校の子どもたち支援をしてほしいです。[30代 地域の協力者]h
- ・学校に通っている子どもたちも含め、同じ場所の往復になりがちな日常生活に、このような外の世界に触れる機会は大変貴重で、大切にすべきことだと思う。地域との関係が薄い現代の生活ではなおさらそうだと感じる。子どもたちとありふれた世間話をしていても、集合住宅地にすんでいるという話はよく聞くが、近所との関わりがないようである。そのような状況で垂水区の一員としてお手伝いすることに意味があったのではないかと思う。もう一つ、このような事業でお手伝いすること自体が、人に頼りにされる経験が大人に比べて少ない子どもたちにとって大切な体験であると思う。子どもたちは人に頼りにされることで自ら積極的に動くことができていると思う。[20代 団体のボランティア]

A-2 垂水区ボランティアまつり

[質問 5]

- ・ゲーム担当、クジ担当、着ぐるみ担当と来ていたメンバーで役割を分担し動いていたように思う。ゲーム担当の人は来たお客さんに自分たちの言葉でルールを説明できていた。クジ担当の人は隣のブー

スの景品を渡すボランティアさんと声をかけ協力できていた。着ぐるみ担当の人は着る担当と引率する担当、チラシを渡す担当と交代しながら、主に子どもたちと交流してボランティアフェスタの宣伝ができていた。[30代 団体職員]

- ・ゲームを2種類した。どちらも初めてのゲームでやり方を教えてもらう。「フリースクール」の症を理解していないが、熱心に説明を繰り返してくれ、声音、明瞭性もことごとく普通の子どものさんとの印象だった。[60代～ 地域の協力者]
- ・様々なブースがあり、色々な催し物でにぎわっている、楽しい雰囲気のものだったので、そのような日頃と違う環境は子どもたちにとってとてもよい刺激になっていると思う。例えば、自分より年齢の高い方とゲームをする時にはいつもより丁寧な言葉遣いで話そうと心掛けているのが伝わったし、逆に年齢の低い子たちへはより分かりやすくゲームの説明をしようと言葉を変えていたりしていた。[20代 団体のボランティア]

[質問 6]

- ・勇気 [60代～ 地域の協力者]
- ・場面転換の折の臨機応変さ／何もすることがない時の過ごし方(すぐゲームに向かう)[60代～ 団体職員]

[質問 7]

- ・初の接触で何がどう問題なのか皆目判らなかつた。予め知らされると潜在意識、先入観を持つことになるのかもしれないが、身近にそうした子どもさんが居ないので戸惑う。それとも「感じない」私が異常だろうか？[60代～ 地域の協力者]
- ・仲間や、親、などが声をかけるのを待っている子どももいる。[40代 地域の協力者]
- ・初の接触で何がどう問題なのか皆目判らなかつた。予め知らされると潜在意識、先入観を持つことになるのかもしれないが、身近にそうした子どもさんが居ないので戸惑う。それとも「感じない」私が異常だろうか？[60代～ 地域の協力者]
- ・小さな子どもを相手にする場面では友達感覚で話しかけることができたのか、リラックスして受け答えをしていたように思う。また、お祭り自体が子どもにとって適度にゆるくて(自由度があつて)活動しやすかつたのでは？と感じた。[30代 団体職員]

A-3 神戸市西水環境フェア

[質問 5]

- ・お店に来てくれた子どもたちよりも年下お客さんに対し、スライムの作り方を教え、一緒に作るという内容だったため、声や表情はいつも以上に明るい印象だった。スライムを作るときに必要な物が足りなくなった時など、「〇〇が足りない！」と積極的に声かけを子どもたちの側から発していた。会場の雰囲気も、食べ物の屋台が多くあり、ステージ上で様々な取り組みも行われており、祭りのようで、そのことも子どもたちの活発さを引き出した要因だと思う。[20代 団体のボランティア]

[質問 6]

- ・記載なし

[質問 7]

- ・学校で今回のようなお店の出店やスポーツ大会という、クラスで役割分担をして、動けない子は周りに責められたり、自信を失ったり、クラスみんなが楽しめるのは余程仲の良いクラスでないとなりにくいのではないかと思う…、フリースクールの子どもは積極的な子は看板をもってお店の宣伝をしたり、あまり積極的でない子も自分のできることを見つけて参加できていたり、そこがいいのではないかと思った。もしかすると、学校で自分を表現できなかった子がフリースクールでは自分らしくいられるのかなと思います。[20代 団体のボランティア]

A-4 垂水商店街催事(いかなご祭り)

[質問 5]

- ・子どもたちの取組態度が大変よく、率先して「いらっしゃいませ」と声をかける様子が子どもたちの間でよく見られた。特に、接客している子どもたち同士で声の大きさを注意しあったり、言葉遣いや態度を直しあったりする場面があり、印象的だった。[20代 団体のボランティア]

[質問 6]

- ・交渉力(いつ交代するか、など)[30代 団体職員]
- ・臨機応変な対応(空気を読むなど)[60代～ 団体職員]
- ・当日だけでなく準備の過程に関わり責任感を持って参加すること。[30代 団体職員]

[質問 7]

- ・客にどこの中学校か尋ねられて、「不登校の子が通うフリースクールです」と堂々と説明している場面が印象的だった。 [20代 団体職員]
- ・遅刻しながらも参加しようとする子がいたのが印象的だった。[30代 団体職員]
- ・地域の温かみの中、萎縮せずのびのびと子どもたちはそれぞれの役割をこなしていたと思う。「接客」ということに意識を置きながら、話し言葉ではない他人との会話の仕方、店員と客という普段の生活では経験できない関係について学ぶことができていた。また、そういった特殊な場に置かれた子どもたち同士が、互いにアドバイスしあうことができたのが大変よかった。[20代 団体のボランティア]

A-5 その他地域のボランティア活動

①商大祭フリーマーケット

[質問 5]

- ・普段では来ることのない大学で活動できたのは子どもたちにとって新鮮だったように思う。また、活動内容も「物を売る」ということなので、子どもたちにとって体験しづらい、お金を稼ぐという経験で得たものは大きいように思う。売りたい品を宣伝したり、説明したりすることで表情や積極性に変化が見られた。[20代 団体のボランティア]

[質問 6]

- ・自己肯定感[20代 団体のボランティア]
- ・準備する力/持続力/対応力/計算力[30代 団体職員]

[質問 7]

- ・普段行かないところ(大学)で、なかなか経験できないお金を稼ぐことを体験するのは、子どもたちにとって良い刺激になったように思います。特に、子どもたちが主体性を持って活動し、結果、お金を得た、という今回のような成功体験は、子どもたちの積極性や自尊心を育むにあたり効果的なことだったと思います。このような事業が続いてほしいと思っています。[20代 団体のボランティア]
- ・子どもの参加意欲はサポート側のスタンスにかかっていると思う。事前の目標設定やタイムテーブルについてどれくらい打ち合わせができているか?それらをベースにどれくらい自由度が持たされているか?子どもの興味関心がどの部分で高まったか、常に状況を見ながらサポートすることが問われていると思う。[30代 団体職員]

②もちつき大会

[質問 5]

- ・フリースクールの子どもたちはもちつきをしながら、もちつきをしたのは3名ほどだった。他の子どもは部屋の中でゲームをしていた。地域の中学校の男子生徒がたくさんきており、地域の方が「この中学校の子たちの活躍は大きいな」という声を聞き、残念でした。[20代 団体のボランティア]
- ・荷物をおいてから椅子のところで何人か集まってゲームしていた。周りの人が遠巻きに見ている感じがしたが、積極的に動くこともなく、あまり良い表情が見られない。もちをついている時は、楽しそうにしていたが何度もつきに行くということはなかった。[20代 団体職員]
- ・帰る時の挨拶を全員きっちりされていた。チームワークが良くなっていた。笑顔の数が多くなっていた。[60代～ 地域の協力者]

[質問 6]

- ・七転び八起きの精神/危機対応する力[60代～ 地域の協力者]
- ・人の話をよく聞こうという姿勢[60代～ 地域の協力者]
- ・自信/経験を重ねること/自らを必要としてもらっている、自分はこれができるという心[40代 地域の協力者]

[質問 7]

- ・最初と帰る前の挨拶は全員でできた。思ったより人が多くみんな少し驚いていた。荷物の置き場がなかったなので、中に入って椅子のところに置きに行くと、そのまま座ってゲームを始めてしまい、最初から最後まで動かない子どもが多かった。もちはもらってきて食べていたようだが、内輪で固まって話さず姿が目立っていた。横に行く人は嫌な顔はしていなかったが、子どもたちが悪い印象をもたれてしまうのではと心配になった。スタッフが積極的に挨拶をするなど好印象をもってもらえるように努力すべきと感じた。地元の中学校の水泳部男子が来ていて、他にも同年代の子どもが多くいたのでなんとなく前に出てきづらかったのかもしれない。最初の方に3人だけ餅をついたが、その時は地域

の人に声をかけられて笑顔を見せる子どももいた。初めの米粒をつぶすところからさせてもらえないか、とスタッフが言っているのを聞いて、地域の人に頼みにいく子どももいた。[20代 団体職員]

- ・中 2 女子の子どもを「もちつきしようよ」と誘ってみたのですが、結局「私はしたくない！」と参加してくれなかった。でも、連れ出したことで地域の人から「やらないの？」と声をかけられる場面があり、やれなくても連れ出したことはよかったのかなと思います。[20代 団体のボランティア]
- ・あまり仲間同士で固まらないで、他の人やグループにもう少し近づき、とけこもうとするとより良いかなと思います。積極的に取り組んでおられて良かったと思います。[60代～ 地域の協力者]
- ・地域の事業所などを活用して体験学習をさせてあげたい。近隣の清掃・ゴミ出しの日などに協力したり会話したりすると、知ってもらえるチャンスであり、理解を深められる。[60代～ 地域の協力者]

③フリースクール文化祭

[質問 5]

- ・印象的な場面として、初めはそこまで乗り気でなかった子どもが、文化祭当日ぎりぎりまでこうすればどうだろう、ああすればいいかもと積極的にお化け屋敷の準備に取り組んでいたのが印象に残った。[20代 団体のボランティア]
- ・訪問してくれた OB と巻きずしを食べながら楽しそうに話している場面がみられた。「お客さん来たで」と声をかけるとみんな自分から挨拶できていた。[20代 団体職員]
- ・活動をする中で積極的に関わる子どもたちは表情が明るく豊かになった。役割がはっきりしていると取り組みやすくモチベーションも上がっていく。達成感と相まって、子どもによって動けるようになっていた。[60代～ 団体職員]

[質問 6]

- ・説明する力/理解する力[30代 団体職員]
- ・協調性[60代～ 団体職員]

[質問 7]

- ・役割意識を持つ機会として文化祭は大きな意味を持っていると思う。残念なのは、文化祭に訪れる人々が、保護者やフリースクール関係者である程度固定されてしまっているということ。もっと地域に開かれた文化祭を目指していくべきだと思う。[20代 団体のボランティア]
- ・子どもたちは来客に慣れている様子だった。話しかけられれば楽しそうに会話できていたし、挨拶もできていた。タイムテーブル通りには進まなかったが、おおむね皆楽しめていた。途中機嫌が悪くなり、輪から外れて参加しない子どももいたが、全員が参加することを強要するのは、自由さを大事にするフリースクールの立場としては違うため、別の部屋で過ごすことを許したのは正しい判断だと思った。[20代 団体職員]

B. 仕事体験学習におけるアンケートのまとめ

B-1 農業体験学習

①稲刈り体験

[質問 5]

- ・男の子はこちらが声をかけても休憩をあまりとらず、どんどん刈っていく印象だった。「休むと集中力が切れる」と話す子どももいた。人数が多かったことも「一気にやろう」と思えた要因かもしれない。女の子は集中して取り組んでいたが、男子より休憩をよく取っていた。ある子は田にいるカエルを休憩中追いかけてたくさん捕まえていた。全体で見ると協調性はあったと思う。[30代 団体職員]

[質問 6]

- ・意欲／好奇心／忍耐力[60代～ 地域の協力者(指導者)]

[質問 7]

- ・体を動かして汗をかくことは大事なことだろうと思う。稲刈りをしながら、刈り残しの落ち穂を拾い、落ち穂を無駄にしないように言ったが、少しでも「もったいない精神」が農作業を通して分かれば嬉しい。また、稲刈り後、古民家のような家で、オセロやゲーム、卓球を仲良くやっていた。スタッフを交えて、仲のよさが分かった。近くの川へ遊びに行き、田舎での遊びを体験するのもいいなあと思った。[60代～ 地域の協力者(指導者)]
- ・子どもたちは満足していたように思う。せっかく小学生・中学生・高校生の子と一緒に過ごしているので、高校生の子が挨拶やお礼をきちんとし、小学生の子が自然と真似をするようなグループ、仲間になると、なおよいと思う。[20代 団体のボランティア]
- ・相手の言ったことが聞き取れず、話がかみ合わない場面があった。お互いに分かろうとしつつも、理解できないイライラで、言葉遣いや表情が悪くなってしまっていた。うまく助け舟を出せなかったので、今度は「こういうこと言いたいんやんな？」とサポートしたい。[20代 団体のボランティア]

②畑作業

[質問 5]

- ・明るく、にこやかに会話できるようになった。 [60代～ 地域の協力者(指導者)]
- ・カブや大根の収穫作業もテンポよくしていた。収穫作業に入らなかった子どもや入れなかった子どもも収穫物を洗う作業に取り組んでいた。高校生が積極的に関わっていた。 [30代 団体職員]

[質問 6]

- ・子どもたち自身の目的意識・向上心の成長を見届けるため、子どもたち各々へのカリキュラムを作り周囲が理解し、支援することで、子どもたち各々の自立を強化する必要がある。 [60代～ 地域の協力者(指導者)]
- ・基礎体力／仕事に対する知識・意欲[30代 団体職員]

[質問 7]

- ・世代・年代ごとに社会・環境変化に対応しているように、各自の自立性・協調性・相互扶助・学習の過程を大事にしてほしい。[60代～ 地域の協力者(指導者)]

③調理実習体験

[質問 5]

- ・料理を作り終えたあとは、自分で「よく働いた!」「頑張った!」という子どもがいて、達成感を得られたようだった。[20代 団体職員]
- ・プログラム全体の流れが伝わらなかったのか、集中がつかない子どもが多かった。[30代 団体職員]
- ・はじめは「料理なんて…」と後ろ向きなことを言っていた子どもも、いざ始まると積極的に取り組み、最後には完成したご飯を何杯もおかわりするなど、事業開始前と比べて前向きな変化が見られた。他人と料理とし、一緒に食べるという経験がよい刺激になったのだと思う。[20代 団体のボランティア]

[質問 6]

- ・自己管理能力(体調管理などを含む)[30代 団体職員]
- ・目新しいことに興味を持てる好奇心[20代 団体職員]
- ・聴いたことを行動に移す力/相手の立場に立って考え、伝える力 [60代～ 団体職員]
- ・自分を思いやる心[20代 団体のボランティア]

[質問 7]

- ・ある班では互いにやりたい仕事を主張しあい、役割分担ができていた。しんどそうな顔で座ったままの子どもがいて気になった。班内で協力できない子どもにどう声をかけるかを考えなければと思った。料理を食べながら話をする様子が、いつもより打ち解けた感じにみえた。みんなで食べているところを写真に撮っている子どもがいて、今までになかったことだと思った。[20代 団体職員]
- ・シンプルなメニューでちょうどよかった。取り組みやすく、家庭に帰って作ることができそうだった。子どもによっては不器用さが目立ったり、作業時間がかかったりすると思われたので、何度も経験を積むことが大切かと思った。[60代～ 団体職員]
- ・料理をし、食べるという一連のプロセスの中に、助け合いや協力・協調という社会に出るうえで必要なスキルが詰めこまれている。目に見えてよい変化が見受けられる子がいたのが印象的だった。[20代 団体のボランティア]

B-2 林業体験学習

[質問 5]

- ・薪割りで、2つ斧の1つが使いにくい斧だった。2人の子がそれぞれで薪割りをしていて、最初は使いやすい斧を使わせてという感じで話していた。その後2人で相談し、使いやすい斧を使う人は少しやりにくい場所で、使いにくい斧を使う人はやりやすい場所でやると決めて作業をしていた。お一緒に作業することによって相談できたのだと思う。普段は疲れたから休むと言う子どもが、今日は薪割り

をずっと頑張っていた。途中で先生が「手伝おうか?」と言われたが断り、大きい薪を割っていた。最初は木に斧が刺さらなかったが、最後には腰が入り、上手になっていた。また友だちを応援するなど、とてもよい雰囲気で作業をしていた。普段したことのない体験で、挑戦する気持ちがとても強くなったと思った。[30代 団体のボランティア]

- ・薪割りが楽しかったようで1時間以上取り組んでいた子どもがいた。ある小学校6年生の女の子は初め「暇だからゲームしよう」という感じだったが、薪割りが「ストレス解消になる」とか「(冗談で師匠と呼ばれる)師匠は陰で努力するんやで」とか言って取り組んでいた。しばらくすると、腰つきがよくなり、子どもは吸収が早いと驚いた。[20代 団体のボランティア]

[質問 6]

- ・いろいろな方との出会いや体験/自然を通しての命の大切さ[30代 団体のボランティア]
- ・リスクマネジメント能力[30代 団体職員]

[質問 7]

- ・子どもにいろいろ教えることはできないけど、友達みたいな同じ立場でいたらいいなと考えているので、「私も薪割りやりたい!」と行って体験させていただきました。子どもの方から「できた?」と会話しに来てくれて、とても楽しかったです。子どもたちも良い経験になったと思います。[20代 団体のボランティア]
- ・子どもたちそれぞれが、関心のあることに集中して取り組んでみたり、得意な子が少し苦手な子にアドバイスをしたりと、それぞれの子どものいいところが発揮できる場になっていた。体験を通して、道具の使い方や社会とのつながりなどを勉強する機会になっており、自分たちで考えて行動することができる場になっていた。[30代 団体のボランティア]
- ・木の伐採や薪割りに参加せずにいた子どもが、スタッフを手伝うことには興味を持ち、笑ったり冗談をいったりしながら楽しんでいた。林業等の企画として準備していたが、子どもがやりたい作業を集中してできており、企画に柔軟さをもたせることが大切だと思った。帰る前の片付けも協力できていた。電車の乗り継ぎが多く、乗る車両が分かれることがあったが、お互いに全員が乗れているか気遣いながら移動できていた。「別の車両に乗った子に、こっちやで、って教えてあげたねん!」と嬉しそうに話してくれる子もいた。スリルを楽しめるいい機会だったのかもしれない。[20代 団体職員]

B-3 仕事体験学習

①垂水商店街歳末フェア

[質問 5]

- ・天候が悪く、店頭での仕事体験が十分にできなかった。[30代 団体職員]
- ・台風のような強風と寒さに耐え、文句も言わず、荒れもせず、やり遂げたことは、素晴らしいことでした。あの状況では悪くなっていくのは当然と思いました。[60代～ 団体職員]
- ・よく頑張って大きな声も出ていました。[30代 地域の協力者]
- ・寒い強風の中よく頑張っていました。[50代 地域の協力者]
- ・積極的にお客様の対応ができていた。[60代～ 地域の協力者]

[質問 6]

- ・ 忍耐力／「とりあえず」で動ける行動力[30代 団体職員]
- ・ 忍耐力／状況判断能力[30代 団体職員]

[質問 7]

- ・ 事前の打ち合わせが不十分で各人の主観で指示をしており、子どもたちが混乱していたように思う。売り場で頑張っていた子どもたちは売り切ったことに満足感があつたようだ。[30代 団体職員]

②画廊喫茶

[質問 5]

- ・ 2日目は慣れてきて言葉遣いが悪くなる場面がみられた。[20代 団体職員]

[質問 6]

- ・ 思っていることを正確に伝える力[20代 団体職員]

[質問 7]

- ・ 指導者の指示を受けながら自分のペースで動いていた。普段あまり言葉を交わしたことの無い子ども同士が、雑談を通して以前よりも打ち解ける機会となった。また、高校生が中学生に言葉遣いについて注意する場面もみられた。2日間参加した子どもから「あつという間だった。もっとやりたかった。」という言葉が聞けてよかったと思う。[20代 団体職員]
- ・ お客がいないときは娘と遊んでいただき、とっても娘も喜んでいました。また来ていただきたいです。お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう。[30代 地域の協力者]
- ・ 今回は2日間だけだったので次回は5～6日ぐらい来てほしい。彼たち、彼女たちの今の姿のままに出会えるのが私にもとても楽しみです。あの子たちの一番いいところは固定観念がない所です。[60代～ 地域の協力者(指導者)]

4. ナラティブ（自分語り）のまとめ及び分析

以下は、各プログラムに参加した子どもたちに実施したナラティブをもとに、個人の中でどのような変化が見られたのかを分析したものである。

①Aさん(中1女子)

(10月)「スポーツの日」のナラティブ

(1)男の子は慣れるまで話せへん。(2)対応せなあかん程度の対応はするつもりやけど自分から話しかけることはないと思う。最低限話すのは、我慢すれば笑って話せるけど、内心ビビりまくってるから。ちょっと顔ひきつってると思う。フリースクールもたまたま知らない男の人がくるときは頑張ってる。

(11月)「商大祭」のナラティブ

(3)自分の友人とか、誰かが知ってる人やとまだわりと話せんねん。でもフリーマーケットとか知らん人ばんばん来るやん。さすがに無理やった。フリマは男の人いっぱい怖かったんやけど、ポテト買いに行ったら塾の先生が大学生でポテト売ってた。めっちゃびっくりした。サッカー部のほうにもおるって言われて、ジャージきとんかなってちょっと見たかった。

(12月)「歳末フェア」のナラティブ

(4)ちゃんと働いてない人もおったよ。おったけど、人それぞれやからな。

(2月)「餅つき」のナラティブ

(5)募金をお願いするコーナーにいたら、たくさんの子どもが来てくれてうれしかった。募金してくれた子にバッジをあげたら、胸に付けてくれて、かわいかったしうれしかった。

(2月)「仲間展」のナラティブ

(6)仲間展の準備はみんな頑張っていたと思う。

Aさんのナラティブ分析

1. 意外な場面と出会う経験をした

Aさんは、10月の「スポーツの日」のナラティブで男の子や初めて出会う人が苦手と(1)(2)の部分などで語っている。しかし11月の「商大祭」で知らない人の中に知っている人を発見する意外な場面に出会うことで、知らない人々への拒絶する気持ちが(3)の語りにある通り“ちょっと見たかった”と一部解消されたことが伺える。

2. 他者への評価

Aさんは、12月の「歳末フェア」のナラティブで(4)のように述べたり、2月の「餅つき大会」のナラティブで人の役に立つ経験ができ(5)の部分で“うれしかった”と述べたりしている。その後、同月に実施した「仲間展」という文化祭のナラティブでは(6)部分で“みんな頑張っていた”と語っており、他者の頑張りを認められるまでにAさんの内面が変化してきていることが伺える。

②Bくん(高3男子)

(9月)「稲刈体験」のナラティブ

(1)自分は対人関係がうまいわけでもないし、そこは仕事やアルバイトを選ぶ上での要素にはなると思う。稲刈りの渡辺先生のような話しやすく面白い人が上司ならやりやすかもしれない。仕事体験を引き受けてくれるようなところなら、どこでも嫌なことをするようなことはないと思うし、今後そういう機会があるなら参加については考えてみたい。

(2)近くに知っているスタッフもいたので特別に緊張するようなことはなかった。

(12月)「農業体験」のナラティブ

(3)重いものを持つとうとする人はあまりいないので自分とかスタッフが少し頑張るべきだとは思っている。1人で重いものを持つのは嫌だけれどスタッフも持っていれば一緒に持っていくかと思えた。

Bくんのナラティブ分析

1. 対人関係の自己分析

Bくんは、9月の「稲刈り」のナラティブの中で、(1)のように自分の対人関係(コミュニケーション)力について、自己分析しながら語っている。また稲刈りプログラムの全体を振り返りながら、理想の職場や上司のイメージを語り、自らの将来考えるために本プログラムへ積極的に参加しようとする姿勢がうかがえる。

2. サポートする大人の重要性

Bくんは、9月の「稲刈り」のナラティブで(2)部分のように“知っているスタッフもいたので”とサポートしてくれる大人の存在について触れている。また、12月の「農業体験」のナラティブでも、(3)の部分で語っているように自らと同じ作業をしてくれる大人の存在について触れていることから、プログラムの実施に際し、信頼できる大人の存在やフォローがBくんにとって重要であることが伺える。

③Dくん(中3男子)

(9月)「稲刈体験」のナラティブ

行くか行かないか?というものは、行くならいくといった感じ。稲刈りは迷うようなものではなかった。(1)選ぶときの基準は、特に用事がなければ行くといった感じ。緊急的な用事がなければいく。

(10月)「商大祭」のナラティブ

(2)販売の仕事は自分はある向きでない。作業系のほうがいい。ああいう場面で参加するなら物を並べるとかお金を管理するほうがいい。商品の並べかたを考えるけどそんなに得意じゃない。決まったサイクルの仕事のほうがやりやすい。

(12月)「歳末フェア」のナラティブ

(3)歳末フェアは紅茶の準備とか裏方は全然できた。(4)入れて人に渡すのは指示があったら動く。命令系統がしっかりしてたら動く。天候がよかったらもっと店的によかったのに。商品は問題なかった。お金があれば自分なら買う。チョコ系統の商品を買う。(5)今回紅茶をいれるのにぐだってたので、先に準備しておくとかしているほうがよかったと思う。

(12月)「里山体験」のナラティブ

(6)火の番をした。火を見てるのは楽しいから。学校とかでやったことはほとんどない。ガンガン火をおこすのは楽しい。

Dくんのナラティブ分析

1. 消極的な姿勢が変化

Dくんは、9月の「稲刈体験」のナラティブで(1)の部分でプログラムへの参加は消極的だと語っている。しかし、様々な体験プログラムの参加を経験する中で、12月の「歳末フェア」では(4)や(5)の部分で改善点を指摘する等語りが見られることから、Dくんの中でプログラムに対する関与の度合いに変化があったことが伺える。

2. 自己を分析

Dくんは、10月の「商大祭」のナラティブの中で(2)の部分のように自分の適性を分析している。そのうえで12月の「歳末フェア」のナラティブでは自分なりに関与できた部分を(3)のように語ってくれていることから、本事業の体験プログラムを通じて彼なりの手ごたえがあったと推察される。

3. 予定プログラム外で予期しない自主的な活動ができる可能性

Dくんは、12月の「里山体験」で、設定していたプログラムへ参加しなかった。しかし(6)の部分で火おこしを楽しむ場面があった。その後、Dくんはバームクーヘンを焼くプログラムに大人が担当する予定だった火の管理という部分で貢献している。このことから、予定外のプログラムで、子どもが違った形でプログラムに参加し、自主的に行動するという予期せぬ結果が得られることが分かった。

5. 「いじめ対策生徒指導推進事業」における実践活動研究のまとめについて

今回の調査研究は、不登校の子どもたち（小・中・高校生）が学校復帰、社会復帰するためにはどんな支援が必要かを提案することにあつた。

舞台としては農業、林業体験、フリーマーケットなどの商業活動の場を設け、活動後に子どもたちの意識を調査。心をどう変化させ、成長させていくかを分析した。手法としては前回同様、本事業の運営委員でもある元京都橘大学大学院教授（心理学）の羽下大信氏の提案による「ナラティブ」という手法によって、子ども自身が体験を内在化することを目指し、加えてその体験過程を取り出すことにした。参加者の語りをもとに彼らの変化過程を分析する手法の一つである。

同時に行事に協力してくれたボランティアのスタッフ、行事の講師役、協力者ら周囲の「大人」にもアンケートを実施。参加した子どもたちの変化、不登校の子どもたちが今後、社会生活を営むうえで必要と思う要素を、客観的な視点で挙げてもらった。

それらを合わせて、不登校支援に必要な内容を探った。

① 子どもたちの意識

報告書で挙げられた3例のナラティブ分析を含め、プログラムに参加した不登校の子どもたち全体の語りに目を通したところ、初めての体験や場に対して慎重になる傾向が浮き彫りになった。

まず自然と接する3種類の行事で、特にプログラム初期のナラティブの中において、子どもたちの消極的な姿勢が目だった。例えば「稲刈り体験」の中3D君の「緊急的な用事がなければいく」、小6Nさんの「稲刈りは早く終わらせようと思った」はその典型例といえる。

しかし、プログラムの後期になると「里山体験」の小6Nさんは「薪割は腕が痛かったけど楽しかった」、中3D君の「学校とかでやったことはほとんどない。ガンガン火をおこすのは楽しい。」などそれぞれプログラムへの関心度が高まってきていることが伺える。このことから、プログラムを継続することが重要な要素となっていると考えられる。

また、子どもたちがコミュニケーションの苦手な部分を補おうとする変化もみられた。アルバイト経験のある高校生Hさんは「水環境フェア」の後、職場に求める条件に「人」を挙げ、コンビニの接客で理不尽な客と接した苦い体験を吐露している。一方で彼女は、「歳末フェア」の後、「準備はスタッフのKさんとできるので楽しい」と話しており、信頼できる人間関係下では、コミュニケーションの壁を乗り越えられる可能性を感じさせてくれた。「里山体験」における小5O君の「渡辺先生(指導者)は優しかった」「説明してくれる内容は分かった」といった感謝の言葉も、いろいろな人と体験や交流することが活動のモチベーションを上げる要素であることを示唆しているように思える。

やはりコミュニケーション力は信頼でき、自分を認めてくれる環境下で育つものであり、高校生Hさんの経験などからみられるように、周囲の大人による接し方如何で明暗が分かれる。これは不登校に限らず思春期の子どもに見られる一般的な傾向でもある。大人への信頼

を深め、コミュニケーション力の基礎を築くには、大人に助けられながら体験活動を安心・安全の中で行えることが効果的であると思われる。

こうしたナラティブ分析の結果から、不登校の子どもたちが社会化されて行き彼らの自立支援を促すという点において、本事業のプログラムは、基礎的な部分で貢献することができていると考えられる。

②大人の客観的視点

不登校の子どもたちを、大人はどう見ているのだろうか。講師や協力者からのアンケート結果からは、全ての行事を通じて子どもたちが社会に出ていく際に必要な要素（質問6）として「コミュニケーションスキル」「周囲の理解者」「仲間」を挙げる意見が多数を占めた。これは子どもたちが体験を通じて求めているものと一致する。一方で、「仕事内容のスキル」「特技」を重視する意見はそれよりも少ない。後者は信頼できる人間関係があってこそ磨けるものであり、まずはコミュニケーション力が重要であると見ている大人が多かった。

そして行事後に「表情」「取り組み態度」の2点で「良くなった」と答えた人が多く、ここでも体験活動の効果を示す結果が得られた。

本調査の結果、不登校の子ども、周囲の大人とも、社会で自立して生きていくうえでコミュニケーション能力が必要であると考えており、その向上が学校復帰でも大きな効果をもたらすと思われる。その背景には信頼できる人間関係、仲間の存在が重要で、とりわけ自分を認めてくれる人の存在が欠かせない。安心できる大人の中での体験活動はそれを実現させるうえで極めて効果的である。これらは子どもたちの生きる力を養う体験活動すべてにいえることでもある。

本事業の運営委員は、調査結果を踏まえその重要性を提案したい。

文責・津谷治英

【付 録】

事業後 スタッフ対談

本事業のプログラムが終了した時点で、各活動に従事した以下の関係者で、全体を振り返った。以下は、その内容を文字おこしたものである。

| | | |
|--------|-----------------------|----------------|
| 対談参加者： | 中林 和子（特定非営利活動法人ふおーらいふ | 理事長） |
| | 矢野 良晃（ | ” 副理事長） |
| | 原田 明季（ | ” 本事業コーディネーター） |
| | 山名 大和（ | ” スタッフ） |
| | 大橋 義和（ | ” スタッフ） |

矢野 点数としては10点満点中4点でした。マイナス要素としては、コーディネーターや中核指導員など大人の側で、プログラムの位置づけが共有できていない部分があった点です。学校現場と異なりここは4・5人くらいの大人がいて、学校よりも少ない人数の子どもを個別に対応プラス集団的な対応をしていくところに良さと難しさがある。対応していく大人の意思疎通がかなり重要。具体的にいうと今回のいかなご祭りにしても、教育的な活動ではあるけれども、そもそもフリースクールの行事なのかという点から認識の違いがあった。大人側の打ち合わせを丁寧にするべきだったと感じた。もう1つはスケジュールにあわせてもう少しプログラムを少なく設定してもよかったかもしれない。ただ、今のプログラム量が必要とも感じています。教育として、子どもが次のステップに行くときに必要なスキルや経験を積んでもらうには、これでも足りないくらいだと思う。私としては普段のスケジュールの方を見直していきたいと思っていて、運動プログラムもあり職業体験プログラムもあり、いろいろなプログラムがあるところを踏まえて年間のスケジュールを作りたい。そしてその全体で子どもたちにどういう経験や知識的なものを提供できるのか考えるきっかけになった。また課題が見つかったという意味でプラスなんですけど、それができなかったという意味ではマイナスですね。

中林 私は今回あまり参加できなかったのも、まとまった書類や事前の情報伝達などから、かえって客観的にみれたかなと思います。本事業はコーディネーターを招いて、いままでとは違う意識をもってすすめられた部分もある。きちんと目的とスタッフの動きがその都度(メールで)送られてきたというのは非常に重要なこと。ただ、矢野さんがおっしゃったようにそれらが共有できていなかったというのであれば、それは時間的な制約はあれど日常的なコミュニケーションの不足で意思疎通ができていなかったために理解がバラバラだったのでしょう。それは全部子どもに返っていくことなので、個々に対応すべき課題が見つかったという点でプラスに捉えています。そういう意味では一本筋の通ったものだったと全体を見て思います。つまり、結果がよければそれでよしということではなくて、私たちは常に問い続けたいといけないんです。なぜかという、子どもにとってどうなのか、どこを

見据えて私たちはサポートしていかなければいけないか、ということがすごく大事だからです。主旨やねらいというのは一見堅苦しく見えますが、それはもう当たり前のこととして私たちは捉えていた。居場所っていうと、そういうものが堅苦しいものとして捉えられてしまいがちだけれども、教育の現場として意識すべきものだと強く思われました。10点満点でつけろといわれても、私自身があまり出ていないものですから…。こういう言い方をしているのかわかりませんが、いろいろな行き違いやらマズさというものがあったにしても、それを踏まえて今後活かそうという気持ちがあれば私は10点満点中7か8くらいは皆さんの努力に対してつけたいと思っています。自分は…3点くらいかもしれませんね(笑)。プログラム数はすごく多いなあと思いましたね。この多さをよくこなしたかなあ、と。コミュニケーションというのは人と喋るということだけではなくて社会性も含まれていたり、自分が何をすべきかわかるということも含まれていて、職業体験も目玉になるところもあるかなと思ったので、今回はそこが削られてしまったのが少し残念に思います。いろんなものを仕事体験に置き換えて考えたらそれは共通しているので構わないとも思いましたが。

大橋 私は本当に個人的にいうと10点満点中5点だと思っています。なぜかという、スタッフとしてどう関わるべきかというところで自分の中でなかなかメリハリがついていなかったからです。フリースクール内での活動とフリースクールから出て社会と交わる時の活動というのは違いがあると、自分の中で感じながらも、明確に設定できなかった。例えば、外に出たらこうことを意識して、こういうことをするんだ、ということを自分の中で具体的にできていなかった。ただ何となく、外ではこういうことが求められるのかな？くらい。この理由を突き詰めると、事前の自分の心の準備というか、目の前の作業の向こう側を理解できてなかったのかなと。でも、そういうところは活動の後の反省で、事前の情報共有が必要だということを学んでちょっと成長できたかな、ということでオマケして5点です。道具とかの準備じゃなくて、事前にこういうことをするんだってことをスタッフ間で共有する必要を本当に切に感じたというか、事前の心づもりの共有を、まず大人たちが一番にしていかなければいけないと思いました。事前準備に全てがつままっていると思いました。そんなところですよ。細かいところをあげるときりがないので…。

中林 初めてだと難しいと思いますよね。事前準備といってもどこまでするのかとか、分かりにくかったと思いますし、そういう意味ではこちらの伝え方を省みるころではあります。

原田 山名さんは、どうですか？

山名 もうみんな出尽くしてるかも…。私は点数とかちょっと甘めなんですけど、7点くらいは

頑張ったかなと思っています。実働部隊みたいところで。これまでの経験で、どういう動きをしたらいいとかある程度イメージはあった上で、今回の事業はこんな感じで共有しましょうというのが事前にあって、こういうところ意識しようとか自分である程度ありつつ、実際どれくらい動けたかというのはプログラムごとにあるんですけど、全体通して7点くらいはあったかなと思っています。みなさんが言うように、事前の共有とかは今後毎回やる度に出てくると思うんですけど、だからといって仕方ないというわけではなく、その都度、今回はこういう課題が出てきたから次はこうしましょうというのは共有する必要あるけど、とはいえ事前の段階で準備できるものは、この人数で、次から次へとプログラムがある中で、みなさん、頑張ったんじゃないかと思ってますし、自分もその中ではよく動いたと言ってあげたい。

原田 山名さんが取ってくれたナラティブがとてもよかったです。一番長い。めっちゃ語ってくれてる文章を取ってくれるので、ナラティブは山名さんのデータを頼りにしていました。

山名 そうですか。取ってる人数は少ないんですけど。一人ひとりはそのやって取れてるかもしれないんですけど、人数はあまり取れなかったの…。

矢野 羽下先生の言葉を借りると、語りがある中に変化があるわけだから、端的な質疑応答では駄目なので、やっぱりいろいろ内容が変化してだらだらとした話の中で子どもたちの変化が見られるというのが今回のナラティブというものの意味として大きいので、数こなすことより、一人とじっくり話すというのがどれだけできたか、ということだと思う。

中林 ナラティブという語りで個人差があり、最後の方はさ、なんか数こなさなきゃ間に合わへん、みたいところがあったじゃないですか。私は正直そのところでピピピッとやって。最初はHちゃんをやって、彼女はいろいろなことを語ってくれた。ゆとりがこちらにないと、次は誰？次は誰？っていう感じでしてしまっ。反省なんですけどね。ナラティブを取ることに目的じゃなくて、そこで何を子どもと交流できるかっていうことよね。語りを通じて。だから、子どもの変化がみられるか、みられないかっていうのはそこだと思うんですよね。じっくり聞くことをしなかったら、語りの中でその変化は出てこない。

矢野 昨日の山名さんとSくんのナラティブの中で、意識されていたかは分かりませんが、CちゃんとSちゃんのナラティブも取られてたんですよ。同時進行で。

山名 確かにSちゃんが入ってきたなと思ったのはありましたね。

矢野 Sちゃんがそこで「老人の人と話せへんかった」みたいなのを言って、「それはスタッフ

がもっと間に入ってくれや」みたいなことを言ったのが語りなんだとおもいますよ。

中 林 なるほど。

山 名 Sくんから話聞こうとしてて、いつの間にかSちゃんが入ってきて、Sくんに聞いたことに対してSちゃんが答えるみたいな感じでしたね。

矢 野 この前、羽下先生は、本来人は語りたいものなんだ、と仰っていました。だからそれが出てきたっていうのはすごい。Sちゃんはもともと語らない人だったし、山名さんとのコミュニケーションも当初はなかった。急にそれを飛び越えて語りがあったというのは、やっぱりそこに語れる何かしらの安全・安心が確保されていたっていうことだと思う。いい場面だったなと思いました。

原 田 そうですね。すごく難しかったですよね。そもそもデータにまとめるのが難しい現場であると思うのに、アンケートを作るのも難しいし、地域の方にアンケートをとるのも難しいし、ナラティブの場をつくり出すのも難しい、全部難しいやん、って(笑)そうやって思ったら、今回実質9月から始まったじゃないですか。しかもそのあたりでザーッと急に新しい子どもがいっぱい入ってきたじゃないですか。だから、まだスタッフとの信頼関係ができていない所から始まったから余計ナラティブが難しかったような気がして。さっきのを聞いてて思ったんですけど、これは半年で終わっちゃいますけど、この事業の目的としては学校復帰だとか、コミュニケーション力の向上に体験活動が有効か有効ではないかというのがありますよね。そういうところを見ると、達成したんじゃないかと思いました。初めの方はナラティブをろくに取れなかったのに、急に語ってくれるようになったとか、そういう話を聞くと、達成したんじゃないかって。初めの方のプログラム1つ1つについては、効果が実感できるような資料が取れなかったとしても、最後の方でナラティブをきちんと取れるようになったっていうんやったら、できたのかなあと思います。

矢 野 今の原田さんの話は、中林さんの前書きに通じるものがありますね。フリースクールは学校と違って、4月当初に子どもがそろってないんですよね。しかも、途中でやめてしまう子もいれば途中から入学する子もいて、信頼関係を築くスタートラインがそれぞれに違う。困難さも違う、学年も違うっていう、いろんな違いがある中で、今回は9月からの短い期間で学校でいうところのクラス運営をしなければいけなかった。だからスタッフも人数がいるし、ナラティブという手法が使えるかどうかということが試されたと思う。

中 林 アンケートに答えていただいた大人の方から、もちつき大会の仲田町の方ですけど、全然

顔も見なくてどこでやってるかも分からなかったのに、それでもアンケートが回ってきたというのには戸惑いがありました、と。もっと触れ合う機会をもっとたらと残念でしたと仰ったので、やっぱり地域の方々と子どもが触れ合うシチュエーションをどう設けるかということもありますね。垂水区の体育祭とかボランティア祭りもそうですけど、そういうのはいいじゃないですか、地域の方と一緒に何かするわけですから。ただ、ひょこっと行って参加させてもらって、子どもと触れ合う場面がなかったら、アンケートが取りにくいということはありませんね。

山名 難しかったのが、一人ひとりに「アンケートお願いします。あそこでやってるんで。」って言おうとした時に、代表の方が私が全部もらうんで、という風になってしまったんです。そこが、フリースクールの子どものどれか分からなくなった要因でもあると思います。

中林 そうかもね。

矢野 たぶん代表の方としては、責任を感じられたんだと思う。アンケートというものは、ちゃんと配って回収しなければならない。もしかしたら、お金かかるけどアンケートに郵便書簡とかを添えて、よかったら投函してください、というのがこちらの誠意を一番示せる方法なのかな。窓口になった方への負担を減らして、一応配らせてもらうけど、個々人で協力してもらえる場合に返送していただくということになっているのでご了承ください、という許可いただくだけの責任にしとく、とするといっぱい配れるかなと思う。

原田 内容も難しかったから、アンケートの説明を初めにしておくとか、そういうのも必要だったかしれません。「あそこにいるので」と一言いうだけでも。

山名 アンケートを配ったときに、アンケートのことを地域の方が子どもに言っちゃうことがありましたね。ちゃんとやったかー、ちゃんとやっとな書かへんぞー、という感じで。

原田 究極のコミュニケーションかもしれませんね。

中林 なるほどね！

原田 そういう意味でスポーツの日はお互いに取り組みの様子を隣で見ることができていたので、アンケートも地域の方から取りに来てくれたりしました。

中林 で、原田さんはコーディネーターやってみてどうだった？

原田 何も分からなかったです(笑)しかも、週に2回しか来ないスタッフさんがいる、会えない！(笑)会えないのに私は突然現れた人だから、話を聞いてもらうのも大変。しかも毎年やっている活動だから、当日や準備の動きをよく知っている人が別にいるのに、全く分からない私がコーディネートしなければならない。子どもとの関わり方がよく分からなかったけど、こなしていく中でちょっとずつ分かってくることもあって。みなさんに助けられたところがいっぱいあって。私が勉強させてもらった半年でした。フリースクールでの関わり方が半分くらい見えたかなと思います。本当にフリースクールのスタッフは忙しいなと思いました。忙しすぎます！(笑)この事業のプログラムは1ヶ月にたくさんありましたが、その他にもフットサル交流会があったり、畑作業もいっぱい行くし。他にいろんなことが並行してあって本当に大変な仕事って思いました。

中林 うん。よくやってくれてると思いますよ、本当に。でも、これってわざわざ文科省のために取り付けた事業じゃないんですよね。日ごろやってるものなのよね。それを意識的にするところなるんですよね。

矢野 なんとなくやってきた仕事を、改めて言語化して丁寧に共有することが、子どもの成長につながっていくと思う。スタッフなどが全員毎日来てる現場だったらいいけれど、それぞれ来る日が違うと、やっぱり言語化してお互いに分かるようにしておく必要があるし、それが子どもにとって分かりやすいユニバーサルな場作りにつながっていくと思う。今回の事業は内容の濃いものでしたね。振り返りや計画、ナラティブの部分でやっていく必要があるだろうなと思います。

中林 それはもう絶対必要！

矢野 今回のプログラムどうやった？と子どもに聞くことを普段の私たちの仕事として位置付けていかなければいけないことなのかなと思います。

中林 それはとあるところでも言われましたね。体験体験っていうけど体験した後どうしてるんですか？って。もう、しっぱなしなんですよ。それはやっぱり違う。ナラティブや振り返りがあってこそ、言語化されたり可視化されたりするから、矢野さんの仰る通り今後はそのようによろしくお願いします。

文部科学省「平成 27 年度いじめ対策等生徒指導推進事業」

～不登校児童生徒等の学校復帰支援並びに社会的自立支援の取り組み～

報告書

平成 28 年 3 月 発行

■発行

特定非営利活動法人ふぉーらいふ

〒655-0034 兵庫県神戸市垂水区仲田2丁目1-32

TEL 078-706-6186 FAX 共通

メール forlife@hi-net.zaq.ne.jp

ホームページ <http://www3.to/forlife>

YouTube <https://www.youtube.com/user/FreeSchoolForLife>

■運営委員（順不同）

羽下 大信 氏 （元京都橘大学大学院教授）

渡辺 進 氏 （元国立大学法人兵庫教育大学教育支援課不登校支援上級相談員）

松木 かおり 氏 （社会福祉法人神戸市垂水区社会福祉協議会 事業課長）

津谷 治英 氏 （神戸新聞社）

中林 和子 （NPO 法人ふぉーらいふ 理事長）

矢野 良晃 （NPO 法人ふぉーらいふ 副理事長）

原田 明季 （NPO 法人ふぉーらいふ 本事業コーディネーター）

■本事業にご協力いただいた団体並びに個人（順不同）

垂水区社会福祉協議会

垂水区ボランティアセンター

垂水区商店街振興組合

千代ヶ丘ふれあいのまちづくり協議会

仲田町町内会設立を考える会

福永 祥子 氏（ギャラリー喫茶あいうゑむオーナー）

渡邊 和俊 氏（三田市里山工房主宰）

中林 泰男 氏

大西 悦子 氏

文部科学省「平成 27 年度いじめ対策等生徒指導推進事業」

～不登校児童生徒等の学校復帰支援並びに社会的自立支援の取り組み～

報告書

平成 28 年 3 月 発行

■発行

特定非営利活動法人ふぉーらいふ

〒655-0034 兵庫県神戸市垂水区仲田2丁目1-32

TEL 078-706-6186 FAX 共通

メール forlife@hi-net.zaq.ne.jp

ホームページ <http://www3.to/forlife>

YouTube <https://www.youtube.com/user/FreeSchoolForLife>